

地域を見つめ、地域を動かす

観光まちづくり

第3号

2023

November

特集 **アートと響き合う観光まちづくり**
神奈川県相模原市藤野
持続可能な暮らしと表現活動が豊かな風景を生み出すまち
島根県大田市温泉津
神楽と温泉街の融合がにぎわいを創出

國學院大學 観光まちづくり学部

今だからこそ、
大切なこと。

AIやSNSなど科学やテクノロジーは進化し続け、
人や情報が世界中をスピーディに行き交う多様化した社会。
今、大切なことは変化に翻弄されることなく
自分を持つことではないでしょうか。
それは、この国の本質、日本人らしさを見据えること。
これこそが國學院大學の学びです。

もっと日本を。もっと世界へ。

 | **國學院大學**

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28 國學院大學 総合企画部 広報課 03-5466-0130
<https://www.kokugakuin.ac.jp>

観光まちづくり

第3号
2023
November

國學院大學 観光まちづくり学部

観光まちづくり

『観光まちづくり』第3号発刊に寄せて

國學院大學観光まちづくり学部長
西村 幸夫

私たち國學院大學観光まちづくり学部は開設から2年目に入りました。2回目の入学式も無事終了し、新たに1年生300人余を迎えることができました。また、2年生からはグループ作業を多く含むプロアクティブな試行である「観光まちづくり演習」が始まり、その成果の一部を学内外に公開する機会をつくることもできました。学生たちも熱心に取り組んでくれています。

本号では「アートと響き合う観光まちづくり」と銘打ち、神奈川県相模原市藤野エリアと島根県大田市温泉津エリアを取り上げ、アートやデザインがまちの魅力づくりにいかに重要な役割を果たしているかを探っています。

アートは対象を見つめる新鮮でクリエイティブな視点をもたらし、対象の新しい価値を見いだす機会を私たちに提供してくれます。本号に紹介されている楽しい活動の様子を眺めているだけで、こうした場所での充実した生活の実感が伝わると思います。その魅力が多く仲間にも拡散され、まちづくりが展開していくのです。そのきっかけを与えてくれるのは、ある時は廃校や古民家であり、またある時は祭礼などの伝統行事です。

地域をより熱い目で見つめる中で、地域の可能性が

広がっています。アートやデザインはその重要な契機となるはずで。

本号ではまた、2023年3月に出版した『観光まちづくり』のための地域の見方・調べ方・考え方（國學院大學地域マネジメント研究センター編、朝倉書店）の共著者のうちの3名による座談会の模様を紹介しています。

書名からも分かる通り、地域調査の際に教科書となることを狙ったもので、実際、私たちの学部の講義である「観光まちづくり演習I」においても、有効に活用されています。こうした観光まちづくりのための教科書はこれまでありませんでしたので、まったくの新しい試みです。これも執筆者の専門分野が、広く観光まちづくりのフィールドをカバーしている本学部の特色を生かした成果だと言えます。

同書は、「第I部 地域を見つめる——観光まちづくりにつながる地域の個性を知る」と「第II部 地域を動かす——観光まちづくりを構想し、実践する」の2部から成っています。これは、私たちの学部のモットーである「地域を見つめ、地域を動かす」とは具体的にどのようなことであるかを、教科書という形で示したものです。

いずれかの現場で、読者の皆様と相まみえることを期待しつつ、本号をお届けいたします。

3 『観光まちづくり』第3号発刊に寄せて
國學院大學観光まちづくり学部長 西村 幸夫

特集 アートと響き合う観光まちづくり

4 神奈川県相模原市藤野
持続可能な暮らしと表現活動が
豊かな風景を生み出すまち

12 島根県大田市温泉津
神楽と温泉街の融合がにぎわいを創出

第3回「観光まちづくりフォーラム」開催報告

- 20 第一部 動き出した観光まちづくり学部
- 21 基調講演
〈まちするたび〉と〈たびするまち〉東京大学教授 吉見 俊哉氏
- 22 吉見教授 × 西村学部長 対談
- 23 第二部 シンポジウム「観光まちづくりのリアル、そして未来」
パネルディスカッション
プレゼンター
24 上綱 久美子氏 三重県伊勢市の観光地デザインの取り組み紹介
25 多田 稔子氏 和歌山県田辺市熊野ツーリストビューローの取り組み紹介
26 前川 さおり氏 岩手県遠野市遠野遺産制度の取り組み紹介

28 第5回～第7回「観光まちづくりカフェ」開催報告

30 地域マネジメント研究センター(CMI)の活動
31 「観光まちづくりライブラリー」

32 地域連携最前線 岐阜県高山市

34 観光まちづくり学部 専任教員紹介
36 第2回教員座談会 執筆者に聞く!教科書の読み方・使い方
42 研究クローズアップ
「変化する農村を調査するようになるまで」 松本 貴文准教授

地域と歩む博物館

- 46 Vol.5 昭和のくらし博物館
- 48 Vol.6 佐田岬半島ミュージアム

50 観光まちづくり学部WEBサイト・観光まちづくり学部X(旧ツイッター)のご案内
観光まちづくり学部GUIDEBOOK 2023 全ページ公開のご案内

表紙の言葉

タイトル“Fujino・Satoyama”

これは“藤野良品店”の“里山クラフトチョコレート”のパッケージのために描き下ろしたものだ。

主人公のカップルのキジはこの辺ではよく見かける野鳥。季節ごとに移ろう山々と空を映す湖の“magic hour”は幻想的で、時に霧に包まれた朝は銀色に光る景色になる。そんな藤野の光景を自分の色で描くのが好き。それにしても山がラブレター持ってるなんて…可愛いすぎない?

内田 松里(うちだまつり)
画家、イラストレーター
(相模原市藤野在住)

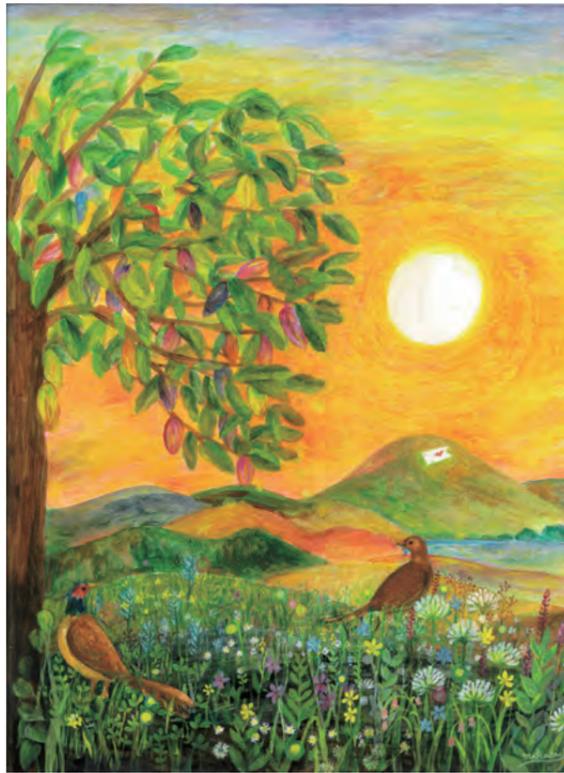
神奈川県相模原市 藤野

持続可能な 表現活動が 豊かな風景を 生み出すまち

神奈川県最北西部かつ、東京都と山梨県の県境に位置する相模原市・藤野(旧津久井郡藤野町)。1980年代後半に「藤野ふるさと芸術村構想」を掲げ、現在に至るまでアート事業を継続している。アーティスト・クリエイターの移住・定住。暮らしを豊かにする地域住民の多様な活動。民間主導による「パーマカルチャー、シュタイナー教育、トランジションタウン」といった動きも目をひく。それぞれが呼応するかのようには生み出されてきた風景と、緩やかに続くまちの変化を取材した。



藤野駅を降りると広がる山あいの風景
高橋政行さんの作品「緑のラブレター」が目飛び込む



藤野在住画家、内田松里画「Fujino-Satoyama」。(本誌表紙絵原画)
藤野には多くのアーティストも住む

構成・文 橋本誠
写真 加藤庸介・橋本誠(上)・椎原恵子(下)
編集協力 相模原市藤野まちづくりセンター・
藤野エリアマネジメント



藤野の歴史と現在

疎開芸術家が夢見た 芸術都市

新宿からJR中央線で、あるいは車で甲州街道を西へ走り、八王子も抜けて約1時間。相模湖に流れ込む相模川流域の自然豊かな山あいに広がるのが藤野のまちだ。人口は約7,900人/約3,700世帯(2023年7月現在)。まちの約80%が森林の中山間地域で、かつては養蚕や炭焼きなどの生業もあった。現在は林業・農業、各種加工業などが目につくものの大きな産業はなく、都心に通勤している人も多い。藤野を含む緑区全体では人口減少や高齢化が深刻だが、コロナ禍でテレワークが広がった影響もあり、藤野ではここ数年、住民の転入が転出を上回っている。風光明媚でありながら、東京にも近いこの地には、太平洋戦争末期に多くの芸術家(猪熊弦一郎、藤田嗣治など)が戦

火を避けて疎開してきていたという。時を経て1986年、疎開芸術家たちがこの地で自然と結びついた芸術都市を夢見たという当時のエピソードを引き継ぎ、「藤野ふるさと芸術村構想」が打ち出された。神奈川県と相模川流域13市町村による「いきいき未来相模川プラン」に基づいたモデル事業のひとつで、これを受けて野外彫刻展などのイベントがスタート、「藤野ふるさと芸術村メッセージ事業」が現在まで長期にわたり展開され、県立施設「藤野芸術の家」ができた(1995年)など、機運をつくる。

芸術に限らない 多様な社会的活動

並行して、自然と共にある暮らしや広義に芸術村のイメージをつくりあげてきたのは、在住芸術家や移住者、各種団体などによる独自の催しや、芸術に限らない多様な社会的活動だ。例えば、メッ

も開催可能な「カフェレストランShu」(2007年)、コンテナギャラリーが立ち並ぶアート市場「ふじのアートヴィレッジ」(2010年)、シェアスタジオ・オフィス「MARGINAL FUJINO」(2012年)、藤野観光案内所「ふじのね」(2009年)、「廃材エコヴィレッジゆるゆる」(2013年)、コワーキングスペースを備える「森のイノベーションラボFUJINO」(2022年)など、拠点も増えてきた。派手な催しが行われたり、大規模な施設が多くつくられてきたわけではないが、芸術家や移住者による創造的な営みが次々と生まれ、地域はそれを受け入れ、行政がささやかに支えるという構造がまちに活力を与え好循環を生み出している。それは藤野を「芸術村」という限られた芸術家によるまちというイメージをいつの間にか塗り替え、「人々が自らの暮らしをつくるまち」に更新している。

セージ事業の開始直後には、行政に頼らず芸術家が自主的に大規模野外アートイベント「砂の曼荼羅」を企画・運営し(1990年)、その後も様々な野外イベントが行われる流れができた。「ふじのサニサイドウォーク」(1993年)、

「ぐるっとお散歩篠原展」(1997年)、

「藤野ぐるっと陶器市」(2000年)、

「こもりりく」(2006)、

人々が自らの暮らしをつくるまちへ更新

廃校を活用した宿泊交流施設「篠原の里」(2005年)、ライブや展覧会



相模湖に流れ込む相模川と日連大橋



藤野ふるさと芸術村
メッセージ事業



藤野観光協会

【参考文献】
相模原市藤野ふるさと芸術村メッセージ事業推進委員会「藤野ふるさと芸術村メッセージ事業35周年記念誌」2022年
相模原市「藤野ふるさと芸術村」地方再生
相模原市「藤野ふるさと芸術村」地方再生
相模原市「藤野ふるさと芸術村」地方再生

藤野町
1995年に吉野町・日連村・名倉村・牧野村・佐野川村が合併して発足。2007年に相模原市に編入され、相模原市藤野町となる。2010年に市が政令指定都市へ移行。藤野地域の行政区は緑区となり、住所からは藤野町の表記が外れている。

藤野ふるさと芸術村構想

パーマカルチャー・センター・ジャパン(PPCCJ)の発足(1996年)、実学や体験を重視した独自の思想とカリキュラムで一貫教育を行うシュタイナー学園初等部・中等部開校(2005年)の影響も大きい。PPCCJでの学びをきっかけに藤野に出会い、そのまま移住する人、シュタイナー学園への通学を目的に移住する人も出てきた。そこにあるものを生かす。感性を大事にする視点は芸術家的でもある。2009年には持続可能な社会をつくる市民活動「トランジション藤野」も始まった。

藤野ふるさと芸術村メッセージ事業

「藤野ふるさと芸術村構想」をPRする位置づけで1990年に神奈川県が事業化し、大掛かりなイベントなどを実施。1992年に藤野町へ事業が移管され、規模はささやかながら現在まで継続して行われている。(次項を参照)



元藤野町職員の内河正道さん

役場内でも違和感があった 芸術という響き

1986年に打ち出された「藤野ふるさと芸術村構想」は、神奈川県主導により「藤野ふるさと芸術村メッセージ事業」として1988年に事業化。1992年に県から藤野町へ事業が移管され、2007年の相模原市への編入を経て現在に至るまで毎年継続して行われている。当初は億単位だった予算も現在は数百万円程度となっているが、このように長期的に芸術文化活動を推進している自治体は全国的にも珍しい。これが有形無形のインパクトを多様な形で生み出している。これまでの変遷、まちとしてのスタンスを探った。

元藤野町職員の内河正道さんは、芸術村構想とメッセージ事業の立ち上げ当時をよく知るひとりだ。藤野の篠原地区の農家に育ち、町役場・企画財政課の職員として1989年から約6年間メッセージ事業の担当を務めた。河内さんは「漠然とした構想が県から打ち出されて、こ

まちの意思表明として制作した『緑のラブレター』

現在の藤野でもその多くを見ることが出来る野外彫刻は、メッセージ事業の一環として1986〜1991年にかけて制作されたものだ。億単位の予算が投入され、国内外の著名なアーティストが参加。「芸術の道」と名づけられた山沿いの通りや休憩所などの公共的スポットに、大型の彫刻作品などが設置された。1988年には国際シンポジウムも開催されメディアの注目を集め、野外環境彫刻展として30,000人を動員した年もあるなど、インパクトがあった。

ただ前頁に記したように、当時まだ少なかった在住芸術家はメッセージ事業自体に距離をとっている人がほとんどだった。その中で彫刻展に参加し、まちのシンボリック作品となっている『緑のラブレター』を制作した造形作家の高橋政行さんは、次のように振り返っている。「そもそも美術界を含む、人間の社会から距離をとり、自然と付き合わざるをえない環境に身を置くために、1980年に横浜から移住しました。『緑のラブレター』は県の企画というよりは、町としてこれからやっていくという意思表明をするために、藤野を象徴する作品をつくりたいという意図で直接役場から相談を受けて形にしたものです。駅から国道から見える山の、町長の土地が使えるということを示されて、表現を通して問題提起をするチャンスだとも思いました。」

「芸術の道」野外環境彫刻展'86~'91と 在住芸術家の思い

藤野の名倉地区を一周する「芸術の道」沿いに多くの野外環境アート作品が設置されている



①菅木志雄「景の切片」 ②フェリット・オズシエン「雨」 ③高橋政行「山の日」 ④三梨伸「両側の丘の斜面」 ⑤杉浦康益「語り合う石たち」と名倉地区の里 ⑥「芸術の道」沿にある葛原神社。古くからの神社や寺院がある集落に屋外環境アートが共存している

「藤野アーツフィア」としての再出発

潮目が変わったのは1992年。バブル崩壊の影響もあり県が予算を打ち切る一方で、町は少ない財政の中でもメッセージ事業の継続を図る。同規模には遠くおよばずともまずは1/10にあたる2,000万円の予算を組み（現在は数百万円/年規模）、別名「藤野アーツフィア」として再出発したのだ。河内さんたちは、代理店などを使わず日頃から親交のあった「砂の曼荼羅」実施メンバーに相談。これまでとは異なり地域の作家や住民を主体としたということ、予算は出すけど内容には口を出さないことなどを伝えて「炎・舞・響・刻」という大きなイベントを実現させた。

藤野らしい暮らしや活動が つくる芸術村

以降、現在に至るまでメッセージ事業「藤野アーツフィア」は名前を変えて毎年開催されており、多い年で年間30以上の団体・イベントがこれに参加している。「芸術家ですが、住民の方が自発的にやりたいと提案してくるものを5〜10万円の補助金も含めて、とにかく町がバックアップする。あまりうるさいことを言わないで、できるだけそれを実現する努力をする。だからいろんな活動が起るようになって、『藤野っていつも何かやっていて、面白いところだよ』という感じになっていったのかなと思います。」（河内さん）

作品は、山の木々の中に白いシートなどでラブレターの形を表現したもので、サイズは縦17m×横26m。添えられた手の形から、山がラブレターを抱えているように見える。これを見る人に、山がメッセージを送っているというコンセプトで、住む場所を藤野に移した高橋さんの根源的な思いが表現されているようだ。

特定の人に負担がかからない 持続可能なやり方

「山が荒れすぎないように、地区の住人で枝打ちに行ったりもしますし、自然の中で生き方もいろいろ教えてもらいました。今人間に必要なのは、自然をもっと理解すること。自然と共に生きる知恵を獲得しなければいけない。藤野には、そういう感性を持っている人の移住がかなり多いと思います。」（高橋さん）

県が手を引いてから行われてきたメッセージ事業の参加企画の中には、大がかりなものも含まれるが、その多くは規模の大きさを求めている。特定の人に負担がかからない持続可能なやり方で、住民や藤野の環境に興味のある人たちが共に楽しめるものが多いのが特徴だ。「作品の販売スタイルも、東京に持って行って売るのはなくて、オープンハウス/アトリエ形式が一般的。景色もいとお茶をしがてら来てくださいという形にして、藤野の暮らしも感じてもらう。それが魅力だと思います。」（高橋さん）

藤野ふるさと芸術村 メッセージ事業 36年の歩み

（河内さん）



河内さんの家は篠原地区で8代続く元養蚕農家

中村賢一さん
旧藤野町に生まれ、1970〜2004年にかけて藤野町役場勤務。福祉、まちづくりの分野などを担当し「パーマカルチャー」や「シユタイナー学園」の誘致も行った。2010年にふじのアートウィレッジ設立（これを母体に2015年に藤野エリアマネジメントを設立、2013年藤野里山交流協議会を設立するなど、民間に立場を変えて地域と移住者の橋渡し役を務めている。

芸術の道
名倉地区などにつくられた28の野外環境アート作品をめぐるときのルートが配布されている。

①②1980年に東京から移住した造形作家の高橋政行さん。同じく作家活動を行うパートナーと共にオープンハウス形式での発表活動も行う ③篠原地区に立つ住む高橋夫妻のアトリエ兼住まい



藤野のアート情報を
まとめて発信

芸術村構想を道半ばで打ち切った県だが、1995年に藤野青少年の家を建て替え、構想のごく一部を実現したような「藤野芸術の家」をオープンする。メッセージ事業をはじめとする芸術家・住民の活動拠点が揃った点ではもちろん、町内外から気軽に訪問できる場所にもなり、機運を後押しした。またこの頃から、メッセージ事業については一定期間に集中して行われる形ではなく、担い手の企画に依りて年間を通して行われる形になっていった。

生活を営み、
文化も生み出す動きの数々

芸術家や活動に協力的な住人がつなげる機会や場もあった。詩人・編集者でもあった旧藤野町議会議員の三宅節子さんの呼びかけをきっかけに、1997年に芸術家集団「きのこがらん」が結成され、自分たちの手で藤野のアート情報をまとめて発信していく活動や、藤野ならではのイベント企画などを手がけていくよ

うになる。また子育て世代の芸術家同士や住人をつなぐ場として「マッコイ保育園(現のびるっこ保育園)」もあった。声をかければ人がすぐ集まることのできるまちの規模感。子育てを機に移住した人も馴染みやすいコミュニティがあったという環境がいい形に作用していたのだ。



神奈川県立「藤野芸術の家」宿泊施設やキャンプ場も備えたアート体験施設

「パーマカルチャー・センター・ジャパン」と
「シュタイナー学園」の開設

また自然と共に生活を営み、人間らしい文化も生み出すという点では価値を共有しながら、芸術活動とは異なるアプローチでそれを体現している活動や拠点も増えていく。まず、1996年に「パーマカルチャー・センター・ジャパン(PCCJ)」が発足。留学先のアメリカでパーマカルチャーに出会い、日本でその提唱と実践を行うことのできる拠点(農家・農場)を探していたのはPCCJの設立清和さん。藤野に移住していた知人のカナダ人女性を訪ねたことをきっかけに候補地としての検討が

パーマカルチャー・センター・
ジャパン (PCCJ)

パーマカルチャーとは、持続可能な農業をもとに、人と自然が共に豊かになるような関係を築いていくためのデザイン手法。日本では、留学先のアメリカでパーマカルチャーに出会った設立清和さんにより、1996年に藤野に「パーマカルチャー・センター・ジャパン(PCCJ)」が発足。その実践と普及活動を行っている。

シュタイナー学園

ドイツの思想家ルドルフ・シュタイナーの教育理念に基づき、子どもの成長・発達に合わせた芸術性豊かな小中高一貫教育を行う。実学や体験を重視したシュタイナー教育独自のカリキュラムにより、どんな時代・どんな環境においても、自分らしく生きていける自立した「自由な人間」を育てることを目指している。日本では1987年にこれを取り入れた「東京シュタイナーシュール」が開設。2005年に「シュタイナー学園」初等部・中等部(2012年には高等部)が開校した。



2005年に開校したシュタイナー学園。通学のため、移住する家族も増えた

進み、役場を訪ねると移住希望者同様、非常に丁寧で協力的な対応を得て決定に至ったという。PCCJはパーマカルチャーの実践に取り組みながら、その理論や手法を単発・連続講座などを通して普及。全国からこれを知りたい人が訪れ、その暮らしの実践をすべくそのまま藤野への移住を決める人もいるという。パーマカルチャー塾の卒業生は2,200名(2022年現在)にのぼる。

続いて、2005年に「シュタイナー学園」初等部・中等部(2012年には高等部)の開校。ドイツ発の独自思想とカリキュラムに基づく教育機関で、日本では1987年に新宿で私塾的に開校。その後、場所を変え規模を大きくしながら、内閣府による構造改革特別区域法(いわゆる特区)の制度を活用して学校法人化とカリキュラムの柔軟化を目指していた。藤野では少子化により2002年頃から小学校の統合や廃校が進み、その数は2006年までに10から3に減少。シュタイナー学園はその廃校の活用※で町にアプローチを行った。町外からは、他の私立校から廃校を林間学校施設として活用する申し出などもあったが、様々な変化を受け入れてきた地域性との相性、通年の活用や家族ぐるみでの移住を期待してシュタイナー学園の受け入れを決めたという。生徒の保護者には医師、コンサルタント、作家、写真家、デザイナーなど時間や場所に拘束されづらい人が多

自然と共に



く、結果として地域医療の充実や地域活動の活性化という思わぬ影響もあったという。

「ふじのアートヴィレッジ」
「地域通貨」「藤野電力」などの
地域活動の誕生

2007年に藤野が相模原市に編入され、メッセージ事業は継続となるが、イベントの数自体も減少傾向となる。しかし公的な動きに頼らない活動や拠点が生まれる流れは止まらず、ライブや展覧会も開催可能な「カフェレストランShu」(2007年)、コンテナギャラリーが立ち並ぶアート市場「ふじのアートヴィレッジ」(2010年)などがオープン。そして市民が自発的に地域の暮らしを考へ、日々の暮らし方を変えていく活動「トランジション藤野」が2009年に始まる。ここから「地域通貨よろづ屋」「藤野電力」など全国的に知られる地域活動も生まれた。

「廃材エコヴィレッジゆるゆる」
エコアートの融合と
助け合いの精神による運営

芸術家が自らの手で生み出した、独自の拠点/活動もある。「廃材エコヴィレッジゆるゆる」は、絵画に始まり万華鏡なども制作する傍嶋飛龍さんが2013年にスタート。藤野の中心部からも外れた山奥の限界集落の一角にある廃工場と敷地を廃材でつくり変えたスペースで、どこかに打ち捨てられていたであろう調度品が至る所に飾られていたり、太陽光の電力による電飾がちりばめられていたり、独特の雰囲気がある。「ここはエコアートが融合したみたいな形で、99.9%がゴミでできています。震災もきっかけですが、コミュニティが不在化している社会に疑問を感じていて、仲間を集めて秘密基地づくりというアクションを始めました。最初の4年はほとんど空間をつくり込むことに時間を

費やしていましたが。」(傍嶋さん)
運営の仕組みはシンプルで、月1回開催しているという説明会に参加することで、誰でもメンバーになることができる。会費や定められている義務はなく、各々がここでやりたいことを部活という形で、共有しながらやる。足りないものは自持ち寄り、つくる。太鼓を叩く、映画を見る、畑をつくる、料理をする、染色をする、子どもと自然の中で遊ぶ、フリースクールをやってみる等々。たまに遊びに来るだけでもいい。

「登録制の村づくりという感じで、緩やかな人のつながりをつくっていくようにしています。お金で人が分断されてしまうからギフトだけでやっていて、お賽銭箱が置いてあるだけで。野菜を持ってくるとか、掃除をするとかでもいい。コモンというか、共有度が高い場所。音楽のセッションみたいな感じで、何か足りなくなっても誰かがいれば続き、そこにまた人が来るみたいな形で続いています。」(傍嶋さん)

「お金を頼らない贈与の関係、助け合いの精神による独自の運営方針に共感し各々の興味とペースで参加・活動するメンバー(村民)が今では900人以上もいるという。メンバーは全国にいると思うのだが、多いのは車を1時間くらい走らせれば来れる、東京や神奈川の方が中心とのことだ。」

「もちろん相性はあると思う。あくまでも僕は僕が村長という感じで、多様な村がたくさんあることが大事で、『よろづ屋』みたいなものもあるし、ものづくり系作家のコミュニティがあったり、藤野はその辺りが豊かだと思えます。」(傍嶋さん)

①②③ふじのアートヴィレッジ
④里山の斜面に県の花ヤマユリが自生する
⑤⑥廃材エコヴィレッジゆるゆる

2013年から「廃材エコヴィレッジゆるゆる」を運営する傍嶋飛龍さん

廃校の活用
シュタイナー学園とは、アーティスツの交流施設「藤野の里」(2005)、体験施設「ふじの体験の森やませみ」(2009)など様々な形で活用が始まった。

築150年以上の古民家を活用した「袖子の家」。農業法人藤野倶楽部は複数の農園や食堂、宿泊施設を運営

ト体験や自然体験を取り入れた合宿プログラムの開発、福祉農園や障がい者を対象とした就労支援施設が参加する農林福藝連携プロジェクトなどの推進にも取り組んでおり、藤野で働くこと、経済活動の循環を生み出すことにも積極的に取り組んでいるように見える。

「コロナの影響が大きかったというのはあります。そこからの移住という流れもありですが、森ラボの利用者も、それまでは通勤していたが、テレワークになったからという人が多い。ワーケーションも、社内で直接会う機会が減ったから合宿として行うという需要があります。」

「日本はベッドタウンが増えてしまっただけで、住むところと働くところが別になりがちですが、本来はまちの中で仕事や経済もある程度まわって暮らせる方がいい。藤野は周辺を含めれば数万人の人口規模だし、仕事がテレワークでできれば、仕事と暮らしが同じ場所から出来る。また、同じ地域で生活する時間が長いことで、日中に地域で色んな人と会える機会も増



①②地下駐車場跡を活用したMARGINAL FUJINOのシェアアトリエ。陶芸や木工などのアトリエが入る

藤野で暮らし、働ける環境と経済の循環を生み出す

子育て世代が増え 社会的活動が活発に

市民や民間の手によるまちづくりの動きもますます盛んになっていく。前項に挙げた「ふじのアートヴィレッジ」は、市町村合併を機に2004年に役場を退職した中村賢一さんの手によるもの。「トランジション藤野」(2009年)の立ち上げは、PCCJに参加する人やシユタイナー学園に通う生徒の保護者など、持続可能な暮らしに興味のある住民が中心となっていた。

子どもをシユタイナー学園に入学させ

トランジション藤野

「トランジション・タウン」は2005年、パーマカルチャー講師のロブ・ホプキンスがイギリス南部のトットネスで起こした市民運動が始まり。地域で社会的な課題に対して、市民が自らの創造力を発揮しながら、地域の底力を高めるために実践的な提案活動を行うムーブメントを指す。藤野では、2009年にコアメンバーが集い活動がスタート。つながりのある安心感を生み出す藤野地域通貨よろづ屋、自立分散型の自然エネルギー活用を推進する「藤野電力」などの様々なワーキンググループが生まれて活動している。



一般社団法人藤野エリアマネジメントがホテル跡地を整備して作ったMARGINAL FUJINO。1階はシェアオフィス



「藤野電力」では太陽光発電ユニットの組立ワークショップや設置も行う

え、新しい取組が始まりやすいことにもつながります。」(高橋さん)

寛容性が育まれてきた 街道沿いのまち

住んでいる地域で過ごす時間が多く、人の距離感が近いという環境があるからこそ「何か新しいことをやろう」となりやすく、それを表現活動として初期の頃から藤野で形にしてきたのは在住芸術家たちだった。それが表現活動に限らず、「トランジション藤野」のような市民の自主的な活動の豊かさにも確かなつながっているのだらう。

またこれは、藤野が歴史的に相模国・武蔵国・甲州の境、街道沿いのまちでもあり新しい人を受け入れてきたこと。新たな領主なり、何か新しいことを始める人に対して真つ向から反対せず、まずは見守る寛容性が育まれていたという土壌にもよるのかもしれない。いづれにして



藤野の緑の山々に囲まれた相模湖。神奈川県の水源地であり、多くの人々の憩いの場、ふるさとである



①シユタイナー学園がきっかけで藤野に移住した高橋靖典さん。一般社団法人藤野エリアマネジメント代表理事も勤める。同法人が運営する「森のインベーショナルラボFUJINO」は住人や来訪者も使えるテレワークの場として人気
②「藤野電力」などスタートアップ企業や地域団体のバックアップも行う
③「藤野ふるさと芸術村メッセージ事業」など日頃の市政で息永く細やかに住民活動を支える相模原市藤野の行政職員のみなさん

ることを目的に藤野に移住した高橋靖典さんも、まさにその担い手のひとり。本業は新規事業コンサルティングやまちづくり活動支援。川崎でシユタイナー教育を取り入れた幼稚園に子どもを通わせていたが、子どもの小学校入学のタイミングで移住に至り、現在は築180年の古民家を借りて暮らしている。中村さんの「ふじのアートヴィレッジ」を手伝っていた流れもあり、これが母体となり2015年に立ち上がった「一般社団法人藤野エリアマネジメント」の代表理事を中村さんと共同で務めている。

「徳島県西郡神山町※の大南信也さんが、創造的過疎」を提唱しています。藤野も移住者は増えながらも全体の人口減少には抗えない中で、子育て世代の割合や、社会的な活動は増えているなど、いい形に変わってきていると思います。神山と同じように人が人を呼ぶ。数人面白い人を知るとちよっと行ってみよう、となるところから始まる人も多い感じですね。」(高橋さん)

昼間に人に会える距離感での活発なコミュニケーション

藤野エリアマネジメントは、ふじのアートヴィレッジの他にも、シェアスタジオ・オフィス「MARGINAL FUJINO」※や、高橋さんが本業としているアーキタイプ株式会社との連合で2022年から「森のインベーショナル

も、「働ける環境と経済の循環を生み出す」ことがまちにさらに活力を与え、好循環をつくっていくに違いない。

地域で暮らし 働ける環境を取り戻す

現在、日本各地の過疎地域で移住・定住の推進や地域活性化の取り組みが行われている。この文脈で地域とアートという「大地の芸術祭」(新潟県十日町市・津南町、2000年)などの大規模な芸術祭の意義、規模は小さくとも、地域の芸術家や団体の活動などが参加する「ベップ・アート・マンス」(大分県別府市、2010年)など中間支援型事業の意義が語られて久しいが、藤野では1990年代からそのあり方を模索しながら実践してきたということになる。

芸術祭などのイベントは対外的に注目を集めやすいが、それはきっかけにしかならない。継続するための様々なコストも課題になる。それだけでなく、藤野のように地域で暮らし、働ける環境を現代らしく取り戻していくこと。芸術家に限らず、市民が「何かしてみたい」という気持ちも後押しできる環境にしていくこと。そのような地道な取り組みや機運のあるまちこそが広義の「芸術村」であり、真に「人々が自らの暮らしをつくるまち」だと言えるのではないだろうか。



山の緑と溪谷のせせらぎも藤野の魅力

新たな秘密拠点～藤野

観光まちづくり学部 教授 南雲 勝志

初めて藤野を訪れたのは、子どもを連れて駅の北側の桐花園というキャンプ場だった。大自然の中で鱒のつかみ取りをしたり、孟宗竹で巨大なそうめん流しをつくったりした。新潟の山村育ちの私でさえ、奥深い山奥にきたたなあ、という感覚を覚えていた。

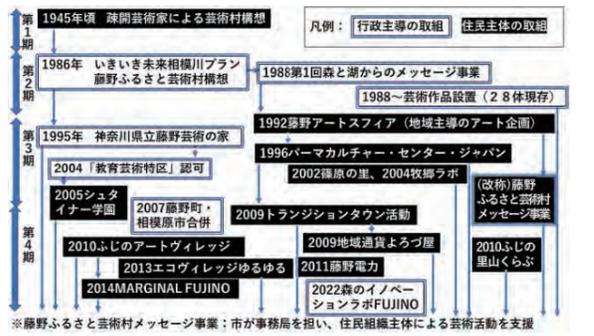
もう一つ忘れられない記憶は中央線終電に乗り高尾駅で降り忘れ、藤野駅まで行ったことが数回ある。タクシードル帰るには遠すぎる。どこか泊まるかと思ってもホテルも無く駅で夜を明かしたことがある。そんなこともあり地理的にはそう遠くないのだが、意識的には遠くて大変なところという認識があった。

昨年、学部の視察で藤野を訪れ、陣馬の湯陣馬園周辺を案内いただき、森や溪谷を生かした新たな観光活動を拝見し、ああ、ここは桐花園の近くだと直感し、今でも変わらない自然の深さや溪谷の美しさに感心した。また基礎ゼミで学生と訪れた和田峠付近での林業の施行現場では、森林や地球環境は俺たちが守るのだという心意気を見せて貰った。

藤野芸術の家の先にかつて私が青山でお世話になった家具工房がある。社長はVAN JUN世代の怪しいオヤジである。不幸にも工房が火災になったが現在も若者を中心に仲間をを広げ、「ふじのリビングアート」として家具だけに留まらない幅広い活動を行っている。

もう一人怪しいおじさんがいる。相模原市の長年お世話になった輸入車専門ショップの店長が急に店を辞め、藤野の奥でひっそり自動車整備の活動をしている。本人曰く藤野に秘密基地をつくったと。

藤野は本質を求めひっそりと活動する人達の新たな秘密拠点になってきたようだ。



これまでの藤野地区における行政主導・住民主体の取組 (道祖英一・瀬田史彦2023より)

の駐車場だった部分をアートやクラフト工房として活用している部分もユニークだが、地域スタートアップ支援のためのシェアオフィス機能もあり、起業に向けたバックアップも行っているという。

森ラボも基本機能としてワーキングスペースを運営しつつ、宿泊を伴うワーケーションが可能な施設の情報提供や、アーティストの多い環境を生かしたアー

ラボFUJINO(森ラボ)※の運営も行っている。

MARGINAL FUJINOは廃墟になったビル跡地をリノベーションした拠点で、半地下

徳島県西郡神山町 1999年から「神山アートプロジェクト」(アトリエ/KAIB)「レジ」の滞在制作を通じた国際交流のための活動を重ねてきた神山町国際交流協会が2004年にNPO法人グリーンバレーを設立(代表理事・大南信也)。サテライトオフィス支援事業、神山町移住交流支援センター(受託管理、コーディネーター)の指定管理事業、森づくり事業などに取り組み過疎地域の創造的な変化を促している。

MARGINAL FUJINO 廃墟になったビル跡地をリノベーションした拠点。アーティストやクラフトメーカーのアトリエやシェアオフィスなどとして16スペースを貸し出す。また地域活動団体や、地域スタートアップ支援のためのシェアオフィスを設け、起業に向けてのバックアップも行っている。

森のインベーショナルラボ FUJINO シェアオフィス・ワーキングスペース、コワーキングとして使える場所を提供。住民・企業・行政・大学などとの共創プロジェクトも実践。藤野地区でのワーケーション環境のコーディネートなども行う。SDGs with ART を掲げ、個性豊かな地域とつながるふたなり、インベーショナルを生み出すことを目指している。

*出典:道祖 英一・瀬田 史彦 「中山間地域における芸術のまちづくりが移住者の移住動機に与える影響についてー相模原市緑区藤野地区をモデルとしてー」都市計画報告集 22 (2),175-181,2023-09-07,p177図3より



観客の手が届く距離で舞われる神楽

「石見神楽」というアート
 鄙びた温泉街が活気つく
 ドン！ ヒューララ、ドン、ドン！
 温泉街に、笛や太鼓の音色が響きわたる。毎週土曜日の夜、町の守り神である「龍御前神社」※の屋内で繰り広げられる石見神楽。華やかな演舞と軽快なリズムに引き寄せられ、大勢の観光客が見物に訪れている。
 神楽は、古代より演劇性と音楽、踊



島根県大田市

神楽と温泉街の融合がにぎわいを創出

りを融合させた舞台芸術として全国で行われている。神社での奉納舞として、地元民が世代を超えて伝え継いできた伝統芸能である。地域の文化であると同時に、楽しさと興奮をもたらしてくれる。神楽のために地元に残り続ける若者も少なくない。
 だが、20数年前まで、温泉津の町には神楽を舞う神楽団「舞子連中」がなかった。それなのになぜ、温泉津エリアでは

構成＝(株)アットゴー 吾郷 直美
 文＝(株)おふいす・ともとも 高野 朋美
 写真＝山本 大智
 写真協力＝大田市観光協会、ゆのつ組、温泉津女子会、石見神楽温泉津舞子連中

温泉津※と書いて「ゆのつ」。この地に古くからある温泉街が、若い世代を魅了する旅スポットへと変貌しつつある。その核となっているのが、神への奉納舞「神楽」。湯を主役に観光を活性化するのが温泉街の定石だが、温泉津エリアでは神楽がキーワードとなり、全てをつなぐ血脈となっている。温泉津エリアで行われているまちづくりの軌跡取材した。

神楽が発展し、観光資源となったのか。まず、それを解き明かしてみよう。
 島根県石見地方。ここでは近世以前から、神楽が盛んに公演されてきた。祭りやお盆になると、どこからともなくお囃子が聞こえてきて、そこに吸い寄せられるように人々が集まる。それが地域の風物詩となっている。
 しかし、温泉津の町で神楽の風景が見られるようになったのは、1997年と比較的最近だ。そのいきさつについては次ページで詳しく語るが、石見神楽のお膝元であるにもかかわらず、温泉津の町で神楽が頻りに公演される様子は、かつてはほとんど見られなかった。
 それが、地元で鎮座する龍御前神社で夜神楽を定期公演するようになり、多くの観光客を呼び起爆剤となったのは、ここ数年のことだ。
 「お客様が来すぎて、対応が大変になったこともありますが」と語るのは、「石見神楽温泉津舞子連中」※(脚注はP14) 副代



温泉津

アートと響き合う
 観光まちづくり



表の河村隆弘さん。インスタグラムやX(旧ツイッター)などのSNSを使い、神楽公演の情報発信を担っている。

神楽好きが周囲を動かす

夜神楽は、限定50席が毎回満席になるほど好評だ。拝観料は一人2000円。拝観時間の夜8時前になると、浴衣姿の温泉客がそぞろ歩きながら神社へと向かう。神楽の前後には、温泉街のバーで一杯飲んだり、カフェで当地グルメを楽しんだり。しつとりとした温泉街で繰り広げられるにぎわいの光景だ。

この光景を生み出すきっかけとなった一人が、神楽面職人の小林泰三さん。神楽の「顔」とも言える舞面を手がけながら、自らも舞い手として活動している。小林さんが神楽と出会ったのは幼少の頃。神楽が盛んな近隣の浜田市に母親の実家があったこともあり、物心がついた時から神楽に親しんでいたという。

「神楽はカッコいい」。これが地元の子どもたちが抱くイメージだ。小林さんも神楽に魅せられ、11歳の頃から面工房に足を運び、面づくりを習い始めた。そこで出会ったのが、地元の神楽団「石見神楽温泉津舞子連中」を共に結成することになる大門克典さん。温泉津出身、神楽好きという共通点から、「いつか温泉津でこんな演目を舞いたい」と夢を膨らませるようになっていった。その思いが、周囲を動かしていくことになる。

●日本神話に登場する怪物ヤマノオロチと、荒ぶる神といわれるスサノオミコトの闘いを描いた石見神楽の演目「大蛇」
 ●●神楽好きの子どもたちは幼少の頃から舞台経験を積む



温泉津は、島根県中部に位置し、港町の温泉街を有している。温泉津町は1954年に発足し、2005年の合併により大田市温泉津町となる。世界遺産「石見銀山」エリア内にある温泉津沖泊港からは、探検された銀が世界へと運び出された歴史がある。重要伝統的建造物群保存地区の古い町並みを中心に、旅館7軒54室定員150名、景観を生かした古民家ゲストハウス12軒34室114名があり、幅広い客層に人気



龍御前神社
 室町時代後期の1532年に建立されたと伝えられる。海運の守り神として古くから信仰されており、境内には船の絵馬や船主が寄進した石灯籠が奉納されている。本殿裏手の巨岩が、神体で龍が口を開けたような姿が特徴

石見神楽
 島根県の石見地方に伝わる伝統芸能。日本書紀や古事記に登場する神話や、神事に関連する舞などを題材に、きらびやかな衣装を身に着けた舞い手が、笛や太鼓の拍子に合わせてダイナミックに舞う。地域の風土や文化と深く結びついている

神楽の有料化と 毎週公演の実現

温泉津に「石見神楽温泉津舞子連中」が発足したのは1997年。当時温泉津町役場で働いていた前出の団長の大門さんは、「地元の祭りの舞台に立ちたい!」との率直な願望を町長に掛け合い、小林さんと「同好会」を発足。皆が本業の傍ら神楽の練習に取り組み、地元祭りの行事、他府県での公演に出演するようになった。地元で後援会ができ、支援を受けたのを機に「石見神楽温泉津舞子連中」となり、神楽団として本格的に活動するようになった。そうした活動の中で、大門さんを始め団員らに地元の観光やまちづくりへの貢献意識が芽生えていったという。

大きな転機となったのは、初めて海を背景に神楽を披露した「海神楽」だ。小林さんは当時、京都造形芸術大学(現・京都芸術大学)に勤務していた。そこで学生を巻き込んだ「温泉津プロジェクト」を立ち上げ、海神楽の企画を手がけた。「海神楽」は、いまだこそ県内外に知られていないが、その時はまったくの無名。少しでもアピールになればと、2009年、プレ公演として龍御前神社で神楽を上演したところ、地元住民や観光客が見に来てくれた。「これなら、月1回の定期公演もできるかも」と思い、自主的に神社公演を始めました。あの頃はチラシすら作れませんでした。

その翌年、古事記編纂1300年の記を土台をつくらせている温泉津エリア。その中心にありながら、小林さんはいま、神楽面職人として新たなチャレンジをしている。石州和紙を使った神楽面の技法を生かしたこれまでにないアート作品、球体の龍の飾りと、石見神楽の世界を表現した壁面レリーフの制作だ。これが観光資源へと発展すれば、伝統を土台にした革新のアートが、町の魅力の一つになると期待されている。

そんな小林さんを応援しながら、神楽の担い手としてではなく、経済人としてまちづくりに取り組む人がいることも、温泉津エリア変貌の要因となっている。

人を呼ぶ 仕掛けで、 経済と人材を 育てる

「神楽? 好きですよ。でもぼくは、神楽を舞うよりスポンサー(経済支援)したいんです」と語るのは、地元で石油販売、運輸、土木、飲食など6部門の事業を展開する小川商店の代表取締役、小川知興さん。神楽の継承を支えながら、まちづくりに関わる人をまとめる役割を担っている。



①石州和紙の立体作品「玉龍」 ②神楽面職人・小林泰三さんの、東京での個展も2年連続開催している ③神楽の世界感を石州和紙で表現した壁面レリーフ ④全国からファンが集まる「海神楽」 ⑤海を背景に設置された海神楽の舞台 ⑥「湯泉津夏祭り」のクライマックスは「大蛇」

念行事として県の予算がつき、温泉津温泉旅館組合が「自分たちが主催者になろう」と声を上げてくれた。チラシの作成や集客も、旅館組合が担うことになった。だがしばらくして、神楽団も旅館組合もあることに気づく。「神楽が観光客数の底上げにつながっていない...」と。定期公演を行う週末は、神楽をやってもやらなくても観光客は来る。これでは神楽が観光資源になり得ない...。

伝統と革新のアートで 観光資源を生む



毎週公演に踏み切った。その後、拝観料を600円、800円、1000円、1500円と段階的に引き上げていった。そうしなければ公演活動を維持できないからだ。神楽には、一着数十万円から数百万円するきらびやかな衣装、そして神楽面が欠かせない。激しい舞で衣装や面が傷み、修繕が必要なのもよくある。そうした費用をどこから

響いている。「統 計学の講義で、 地域経済を考 える機会がありました。これからの時代、 一企業が一人勝ちしてはいけない、みん なで経済を回すやり方ではない、地方は 生き残れないと思いました」。 温泉津を見回すと、後継者がおらず、 廃業を余儀なくされる会社が続出して いた。空き店舗が増え、働く場所が失われ て行った。小川さんは、人が当たり前前

採用され、キャリアアップできる居場所 に変えたいと考えるようになった。そう した思いの中で向き合っていたのが、 経済を回すという観点でのまちづくりで あり、観光産業だ。 「僕は、観光はあらゆる事業とコミッ トし合えると思っています。観光を旅館 や飲食といった狭い意味では捉えていま せん」(小川さん)。 自分たちが持っているノウハウやリ ソースを観光事業に投入することで、経

捻出するかが、神楽団の頭痛の種だ。そ れを解決する方法が、拝観料の引き上げ だった。 「石見温泉津舞子連中」は、地元の神 社例大祭を主に活動し、地域に根差し地 域に愛される神楽団であることを掲げて いる。 「けれど、1000円に値上げしたとき、 地元住民から『高くなったからもう見に 行けない』と 言われ、地元 のために始め た神楽なの に...と悩み ました。そこ で、年6回の 奉納神楽だ けは無料にす る代わり、観 客の皆さん に、神楽団を 応援する「御花」※と神社への「御神前」 で寄付を募る案を考えました。それを龍 御前神社の修復費に充て、神楽を神社で 継続できるようにしようというアイデア を出した時、氏子の皆さんから拍手が起 こりました。神楽の継承は僕たちだけで はできない。神社と地元の皆さんの協力 があってこそなんです」(小林さん)。 神社、地元住民、旅館組合が連携し、 観光と経済を紡ぐことで、神楽を継承す



濟の波及効果が生まれる。そうした発想 から組織したのが、会則も会費もない有 志のネットワーク「ゆのつ組」※だ。 ゆのつ組は、温泉津を中心に島根県内 外でイベントを開催する人への機材の無 料貸し出しや、ノウハウの提供などで、 にぎわいの創出に大きな役割を果たして いる。温泉街をまるごとピアホールに見 立てた「ノスタルジックビアガーデンゆ のつ」、クラシックカーが大集合する「ノ スタルジック温泉津」など、毎月のように イベントが開催されることで、人を呼 び込む仕掛けが生まれ出されている。そ の賑わいと熱気を強く印象付けている。 小川さんは、早くから「温泉津温泉夏 祭り」を有料化し、収益を祭りの継続の資 金源にしている。にぎわいを生み出すこ うした動きを途絶えさせないよう、持続 可能な基盤をどうつくるかを考えること が重要だと小川さん。「誰か一人に頼る のではなく、組織で活動できる体制づく りが重要だと思っています」。



小川商店の代表取締役・小川知興さん。大学卒業後、輸入車販売の会社で勤務し、27歳で帰郷。家業を 発展させながら、温泉津エリアに経済循環を生み出すさ まざまな取り組みを行っている



御花 通常は、お祝いやお 供えとして出す金 品。ここでは、神楽 への感謝や舞子連 中や団員を応援す る気持ちを込めた 寄付行為。



石見神楽の団員による 奏楽と囃子が流れる自動販売機

ゆのつ組 住民有志を中心に 地域活性化イベン トを実行するネット ワーク組織。会則は なく、イベント機材 を無料で貸し出す など、町にどまらず 島根県内外のにぎ わいにつながる 催しの自主的な企 画・開催を後押しし ている。祭りなどの 行事を通じた若手 の育成にも貢献し ている。

島根県大田市温泉津



「古民家再生」で子どもたちに残すまちづくり
温泉津エリアは、過疎化が深刻な地域だ。少子高齢化が進み、住まい手をなくした家が点在する。そこを改装し、温泉旅館とは違うタイプの宿に生まれ変わらせているのが、宿泊観光業を通じたまちづくりを行う株式会社WATOWAだ。現在、合計90人の宿泊客を受け入れる古民家ドミトリやゲストハウスを運営している。

「子どもたちが大きくなった時、町が元気でいられるように。それが一番のモチベーションです」と語るのは、WATOWA代表取締役社長の近江雅子さん。温泉津エリアの古刹、西念寺の住職を夫に持つ、三人の子のお母さんだ。

『近江さんが温泉津エリアのまちおこしの流れを変えた』。そう言う人は多い。しかし近江さん自身は「私はもともとパート勤務の主婦。宿泊施設を運営し始めたのも、詳しいマーケティング調査を行ったわけではない、こんなものがあったら温泉津に人が来てくれるだろうという肌感覚によるものです」と話す。

1泊3300円の部屋から1泊10万円

さんは顧客の満足度向上にとどまらず、やりたいことがある人を応援し、温泉津の様々な人を紹介しつなげるハブとしても活躍する。

いま、近江さんが応援したいと思ってるのが、若手アーティストだ。近江さんは、この人だ！と思う人がいたら食事に誘い、温泉津エリアで活動するさまざまなスペシャリストに同席してもらい、直接人脈をつなげる取り組みをしている。「温泉津囲い込みっていうんですけど(笑)。地元の人に応援や関わりがあることで、ここでならやりたいことができるかもしれないって、思ってもらえやすよね。」

囲い込みが効果を発揮し、温泉津の町にはいま、イターンやUターン者が相次いでいる。スパイスカレーやアートを楽しめるカフェ「本と喫茶のゲンシヨウ」をオープンした西田優花さん夫婦、間伐材を燃料にしたサウナやスナックなどの複合施設「時津風」をオープンした合同会社山山インストールのメンバーなどが代表例だ。

温泉津の町になかったものを創り出し、新しい風を吹かせているイターンやUターンの若者たち。そんな若者を快く受け入れているのが、他でもない、地元

の一棟貸しまで、さまざまな客層を対象にした宿は、すぐに予約で埋まるほど好評。あえてターゲットを絞らざるを得なかったのは、「いろいろな人に来てほしい」という近江さんの思いによるものだ。

近江さんは、温泉津の出身ではない。近隣にある江津市で生まれ育ち、結婚して東京で暮らした。そして約十年前、一家で温泉津に越してきたイターン組だ。

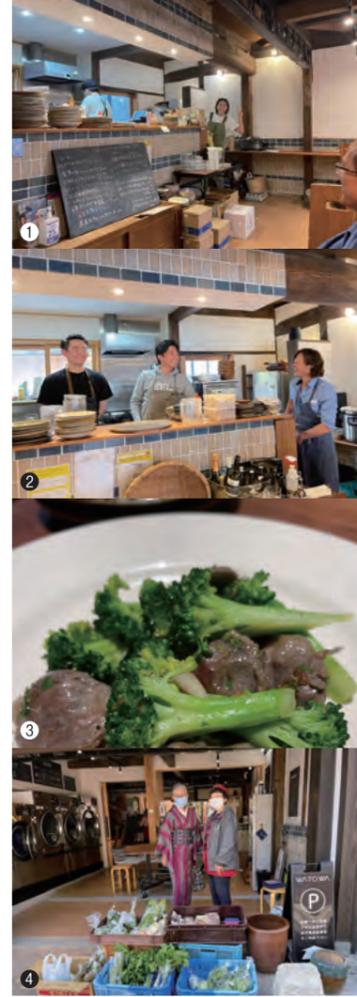
何かできることはないだろうか。そう感じた近江さんは2014年、温泉津の主婦を集めて「温泉津女子会」を結成。ボランティアで漁師飯を提供する飲食店をオープンした。「あの頃、まちづくりの会合に行くとき男性ばかりでした。女性の私たちでも何かできないかな、と思って結成したのが温泉津女子会。でも、皆さんをまとめる器量が私にはなくて、飲食店はやめることになりました。」

地元食材を「ごちそう」に変える場の確保
次に何をしようか。そう思っていたとき、民家に泊まって田舎暮らしを体験する「しまね田舎ツーリズム」を知り、民泊ならお寺の仕事を両立できそうだと考えた。そして、近所の空き家を活用した

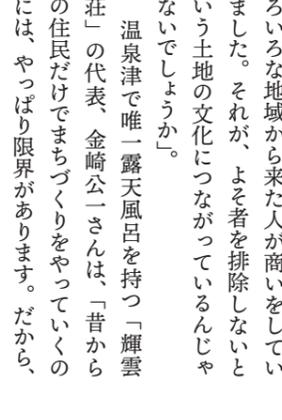
住民だ。
なぜ温泉津エリアは、イターンやUターン者を抵抗なく受け入れているのか。この疑問に答えてくれたのが、温泉津温泉旅館組合の会員の方たちだ。大正時代から続く老舗温泉旅館「のわや」の代表、河原文孝さんはこう話す。「温泉津はかつて天領だった歴史があり、いろいろな地域から来た人が商いをしていました。それが、よそ者を排除しないという土地の文化につながっているんじゃないでしょうか。」

温泉津で唯一露天風呂を持つ「輝雲荘」の代表、金崎公一さんは、「昔からの住民だけでまちづくりをやっていくのは、やっぱり限界があります。だから、外部から来た若い人が空き家を活用する動きはすごく大事。彼らがここに定着できるように、調整役になりたいと思っています」と話す。

玄関口にダイニングバーを新設した「なかのや」の後継者・河野弘弘さんは、3年前、大手企業を辞めUターンしてきた。ゆのつ組がSNSで温泉津エリアの



「新たな発想」が



「地域の資源」をつなぐ

様子を発信しているのを見て、旅館を継ぐことを決意したという。「若い人たちの盛り上がりを知り、これならやれると思って帰ってきました。昔は移住者が入りにくい雰囲気も少しありましたが、もともと温泉街は、外から来た観光客を受け入れてきた所。だんだん応援する気運が高まって来ているんだと思います。」

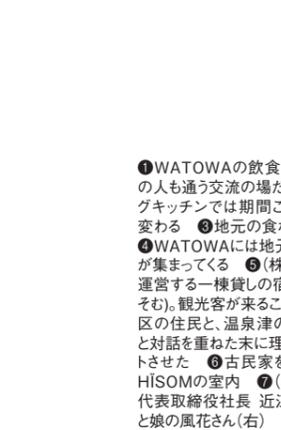
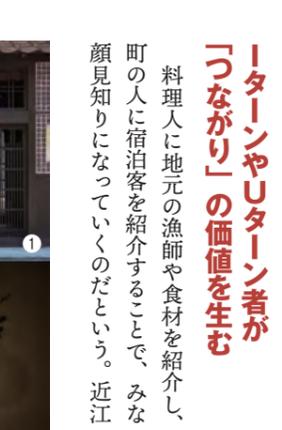
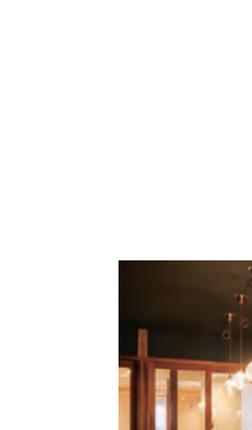
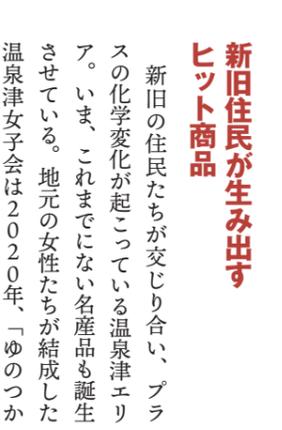
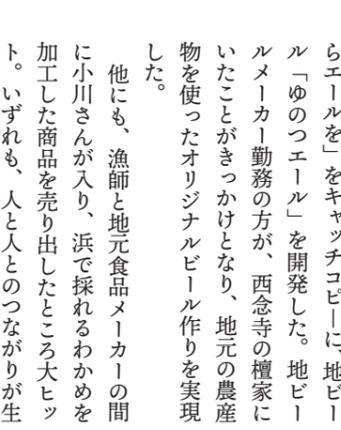
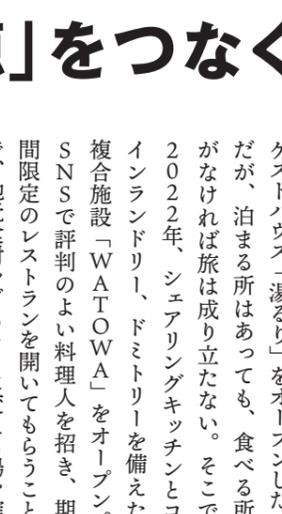
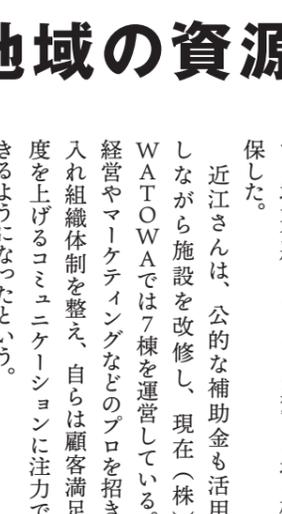
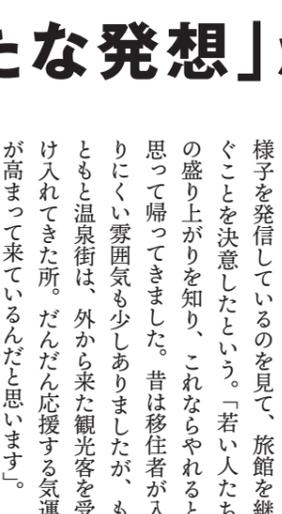
近江さんは、公的な補助金も活用しながら施設を改修し、現在(株)WATOWAでは7棟を運営している。経営やマーケティングなどのプロを招き入れ組織体制を整え、自らは顧客満足度を上げるコミュニケーションに注力できようになったという。

ゲストハウス「湯るり」をオープンしたが、泊まる所はあっても、食べる所がなければ旅は成り立たない。そこで2022年、シェアリングキッチンとコインランドリー、ドミトリを備えた複合施設「WATOWA」をオープン。SNSで評判のよい料理人を招き、期間限定のレストランを開いてもらうことで、地元食材を「ごちそう」に変える場を確保した。

「イターンやUターン者が「つながり」の価値を生む」
料理人に地元の漁師や食材を紹介し、町の人に宿泊客を紹介することで、近江

新旧住民が生み出すヒット商品
新旧の住民たちが交じり合い、プラズの化学変化が起こっている温泉津エリア。いま、これまでにない名産品も誕生させている。地元の女性たちが結成した温泉津女子会は2020年、「ゆのつかからエール」をキャッチコピーに、地ビール「ゆのつかエール」を開発した。地ビールメーカー勤務の方が、西念寺の檀家にいたことがきっかけとなり、地元の農産物を使ったオリジナルビール作りを実現した。

他にも、漁師と地元食品メーカーの間に小川さんが入り、浜で採れるわかめを加工した商品を売り出したところ大ヒット。いずれも、人と人とのつながりが生み出した新しい価値だ。



① WATOWAの飲食スペース。地元の人も通う交流の場だ ② シェアリングキッチンでは期間ごとに料理人が変わる ③ 地元の食材を使った一品 ④ WATOWAには地元で採れた食材が集まってくる ⑤ (株)WATOWAが運営する一棟貸しの宿「HISOM」(ひそむ)。観光客が来ることのない日祖地区の住民と、温泉津の未来のために対話を重ねた末に理解を得てスタートさせた ⑥ 古民家をリフォームしたHISOMの室内 ⑦ (株)WATOWA代表取締役社長 近江雅子さん(左)と娘の風花さん(右)

① サウナ、カフェ&スナック、ショップ&ギャラリーの複合施設 時津風 ② スナック「津」では朝食も提供

外からの「知見」と「視点」を まちづくりに活かす

「温泉津の町はどんな町ですか？」。そう聞かれたとき、即座に温泉津の良さを伝えられるよう、町の価値を言語化、その役割を担っているのが、前出の「本と喫茶のケンショウシヤ」を夫婦で営むIターン移住者の西田さんだ。

西田さんが最初に温泉津エリアにやって来たのは、東京のメディア企業で石州和紙の海外プロモーションをしていた頃。現地リサーチのついでに温泉津温泉に立ち寄ったのがきっかけだったという。その後、やりたいことをするために独立。地方に一定期間滞在し、アート作品を作るアーティスト・イン・レジデンスというプログラムで、1カ月半ほど温泉津エリアにとどまり、作品を作った。「私はもともとアート好き。温泉津エリアは自然素材を自由に入手できる所だから、何でも作れます」。

コロナ禍で、東京にいる必要性を感じなくなったある日、西田さんは近江さんの記事を読んだ。「IターンやUターンをしたものの、地元の方たちと価値観のギャップが埋まらずに都会に戻るとい話をよく聞いていました。近江さんの記事では、対話を重ねることとでギャップを埋めていくプロセスが語られていました」。

さっそく空き家バンクを調べたところ、夜神楽を行っている援事業とをつなぐ西田さん、この3人の存在が変化の促進剤になっていると、下垣さんは見ている。

住民の動きをどうサポートするか。下垣さんは、市が掲げた「大田市新観光振興計画」を示しながら語る。「地域にどれだけ観光客が来るかではなく、観光客によってどれだけ経済循環が生まれるか。そこにこだわった計画です。こうした計画を策定できたのも、まちづくりががんばる住民の動きがあったからこそです」。

行政としては今後、民間ではカバーしきれないことを支援していくとのこと。例えば空き家の改修。温泉津の温泉街は、重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、建物の改修や増改築にさまざまな制限が設けられている。空き家を活用したい人が、望むテイストを改修に反映しながら、伝統建築を守るように、文化財の保存に長けた技師をつなぐサポートを続けていく。

また、温泉津在住の大田市議会議員小林太さんは、代々受け継ぎ守ってきた地元住民の思いや誇り、共助の精神をIターンやUターンの人たちに伝えながら、町の発展を後押ししていきたいと表明している。

住民が興した新会社が行政と連携してまちづくりを推進

「地元住民が興した住民のための会社」だ。もともとは、行政への補助金申請や、国が行う公募事業への応募などを行うた



⑨約1300年の歴史があるといわれる温泉津温泉 ⑩重要伝統的建造物群保存地区となっている温泉津温泉街 ⑪温泉津のシンボルでもある日本最大級の「温泉津焼」登り窯



アートが

めが発足したが、今後は、まちづくりのビジョンを実現する組織として機能する見通しだ。個人ではできないまちづくりを、個々の住民が組織を通して一体となり、行政と連携しながら広げていく。近い将来、その姿を見られるはずだ。

温泉津の新時代が完成へ

観光まちづくり学部 教授 井門 隆夫

温泉津との出会いは、20年ほど前、後継者のいなかった木造3階建ての旅館を、所有者から依頼を受けた東京の会社が購入し、その会社から若者を育てる場として運営を任せられた。当時24歳の若女将を訪ねたのが最初だった。若女将はその後、アジア各地のコミュニティーの開拓者となり活躍していくが、残念ながらしばらくして旅館は休業し、灯は消えた。その後、温泉津を訪れることはなかったが、久しぶりに訪れたのは、前職の高崎経済大学時代の2020年。山陰自動車道の全通に向けた集いで出会った大田市の榎野弘和市長から、市内での学生インターシップの相談を受け、夏の3週間、温泉津温泉の旅館での就労体験に学生2人を派遣した。その学生に会いに行ったのが約15年ぶりの温泉津訪問だった。

全国的に地域のコミュニティーは高齢化が顕著で、いかにして若者が住み、活躍できる地域とするかが課題で、温泉津も同様だった。しかし、現在の温泉津は本文にあるとおり、若者たちの移住が続く町になり、小規模温泉地のお手本のような存在になりつつある。おそらく山陰自動車道が出雲と直結する2024年度後半には、一気に世界中から注目される温泉地になるだろう。

前出のインターシップ生の中には毎年温泉津を繰り返し訪れ、移住が決まった卒業生もいる。いま温泉津の町を歩いているのは20〜40代が多い。残された課題は、後継者のいない温泉旅館の再生である。しかし、未来の見える温泉地には資本支援をしてもらえる金融セクターが必ず存在する。

旅館も再生され、温泉津の新時代が完成する日は近い。

広げる「つながり」

①「温泉津100人会議」のメンバー ②温泉津出身の舞台俳優 竹内大樹さん ③竹内さんが演じる舞台 ④西田優花さん夫婦が営む「本と喫茶のケンショウシヤ」 ⑤人気メニューのスパイスカレー ⑥西田優花さんとご主人の高田率さん ⑦西田さんの石州和紙のアート作品



龍御前神社のすぐ隣に空き家があることが分かった。西田さんは、自ら神楽団への入団を希望するほどの神楽好き。これは運命だと思いつき、雨漏りする空き家を改装し、デザイナーでありスパイスカレー作りが得意な夫と、アートをさりげなく飾るカフェをオープンした。

石見地方の名所を舞台に 総合芸術祭の開催へ

一方、「劇場ではなく、本物の古民家や石切り場を舞台にした演劇が、やっぱりいいですよ」と語るのは、温泉津出身の舞台俳優、竹内大樹さん。石見地方にある名所を演劇の舞台にするという斬新な発想で、地方創生につながる公演をプロデュースしている。東京での舞台公演で収入を得ながら、芸術でふるさとに貢献しようとしている竹内さん。このほど、竹内さんが立ち上げた芸術による町おこし「I W A M I ARTS PROJECT」が文化庁の事業に採択され、大田市内の小中高生を対

象とした演劇公演が行われることになった。地元の人たちとの交流と応援がそのきっかけとなったという。

住民たちの動きが後押し 「大田市新観光振興計画」

温泉津エリアのまちづくりは、住民主導で行われている。その様子を見守りながら、行政としてどんなアプローチができるかを考えていると話すのが、大田市観光振興課の下垣英樹さんだ。以前、観光振興課で観光業務に携わり、2021年から再び観光振興課に配属された。その時、町の様子的変化に気づいたと言った。

「かつては若い人の活動にあまり協力的ではない印象だったんですが、地元の方が『これからは若い人の時代。若い人を応援する』と仰るのを聞いた時、変わっていく温泉津を実感しました」。

ゆのつ組を組織し、町のまとめ役を担っている小川さん、地域住民と対話を重ねて旅館とは違うタイプの宿泊施設を作り、幅広い客層の取り込みをチャレンジしている近江さん、カフェを運営しながら、住民が実現したいことと行政の支

動き出した観光まちづくり学部

2022年11月15日、第3回「観光まちづくりフォーラム」が開催された。新学部が開設されて初のフォーラムでは、本学部が考える観光まちづくりと、持続可能な地域の実現をどのように成し遂げていくか、活発な議論が交わされた。第一部では、主催者と来賓のあいさつのほか、2023年4月より本学部に着任した吉見俊哉氏の基調講演と、吉見氏と西村幸夫学部長との対談を実施した。

國學院大學の学びや 知の財産へ

第一部冒頭では、針本正行國學院大學学長が、来賓および出席者へ礼を述べるとともに、岐阜県高山市、千葉県香取市佐原地区、三重県鳥羽市をはじめ、各地との包括連携協定の進捗や、2022年夏に行われた学部でのフィールドワーク授業について紹介した。そして、「本日はいただいたご提言は、これからのまちづくりと地域づくりの道標となるとともに、未来の観光まちづくり学の構築にもつながり、國學院大學の学びや知の財産として息づく」と締めくくった。

「観光まちづくり」の理念が 大学の学部として結実

続いて、来賓の水嶋智氏（国土交通審議官）から、祝辞が寄せられた。水嶋氏は、



来賓の水嶋智氏（国土交通審議官）



針本正行國學院大學学長



西村幸夫教授（観光まちづくり学部長）

「観光まちづくり」の理念が大学の学部として結実したことは、観光政策を担当してきた者としては非常にありがたく感じる」と述べられた。また、観光まちづくり学部の実践を重視する姿勢や、現場での経験が豊富な教員陣にも期待が寄せられた。

の観光大臣会合で、各国から大きな関心が寄せられていると紹介されたうえで、「今後はコロナ禍の中で経済・社会をどう動かすかが問われる。このような時代にこそ、観光まちづくりについて議論をしていくことが重要」と、ポストコロナの観光まちづくりへの期待が述べられた。

少人数授業や フィールドワーク授業に注力

続いて、西村学部長から、あいさつと学部の概要説明がなされた。西村学部長は、開設初年度となる2022年度の授業風景を紹介しながら、1年次の必修授業「まちづくりと観光」の満足度が95%を記録したこと、少人数授業やフィールドワーク授業に注力していること、これから集大成として予定されている卒業研究のあらましについて説明した。

さらに西村学部長は、学部の基礎をなす4つの分野（社会、資源、政策、計画、交流・産業）とメソッド科目について触れ、「これら4つの分野を理解し、実践ができる専門家を育てていきたい」と語った。

基調講演



第一部の基調講演では、吉見俊哉氏（東京大学教授（当時））が、「まちづくり」と「たびするまち」と題する基調講演を行い、自身が考える観光まちづくりへの抱負と、都心北東部で展開する「東京文化遺産会議」での活動を語った。

まず吉見氏は、2023年4月に観光まちづくり学部に着任することへの期待を述べた。そして、氏が考える観光まちづくり像、自身が取り組んできた「東京文化遺産区」構想、氏が考える都市の未来の3点について話した。

「観光まちづくり学部」とは 「たびまち学部」

吉見氏はまず、前提として、私たちの社会におけるモビリティ（移動のあり方）の変化に触れる。「高度成長期から、私たちは『より速く、より高く、より強い』社会を目指してきました。しかし、ある程度の豊かさを実現した今、むしろ『より愉しく、よりしなやかに、より永く』の生活を実現すべく、社会を変えていく必要がある」と語る。それに伴い、都市を形作るさまざまな異なる速さの移動手段をデザインする社会（移動社会）が求められているという。

そのうえで吉見氏は、「観光」を非日常に身を置くという意味で「たび」、「まちづくり」を日常の世界に住まうという意味で「まち」と言い換え、移動社会において、この「たび」と「まち」が接近しているという。たとえば、日常の中の「たび」であるまち歩きを楽しむ人や、「たび」の中に住まう二拠点居住の人口が増えているとのデータが示された。

そして、観光まちづくり学部は、この切り離せない「たび」と「まち」を、

さまざまな分野の教員と学生が協働し、既存の学知とつなげ、発展させていく場、いわば「たびまち学部」だと語った。

都心北東部から俯瞰する、 都市の未来

続いて氏は、自身が取り組んできた「東京文化遺産区」構想について語る。東京文化遺産区とは、東京の北東部の谷根千、根岸一帯にはじまり、上野、本郷、湯島、神保町、神田、秋葉原に至る地区を指す。高度成長期、東京の文化の中心は、都心の北東から都心の南西に移った。その時に大規模な開発から取り残された都心北東部には、近世から現代にかけての文化遺産が残っている。

しかし、これらの地区はわずか半径2kmの徒歩圏であるにもかかわらず、地区のつながりが認識されていないという現状がある。東京文化遺産区構想は、この一帯に集積する文化遺産をさらに生かすことで、高度成長期に失われた東京の豊かな資源を再生することを目的とする。

これまでの取り組みとして、湯島、神田、上野に集積する6つの宗教・学術施設が協働し、宗教的寛容性を世界に発信する「社教会堂研究会」などが挙げられた。

また氏は、「自動車、徒歩、自転車、船、トラムなど、さまざまな速さの交通手段を、複合的に組み合わせたまちをど



アムステルダム中央駅とトラム

ポスト成長社会における 「たびまち学部」の役割

最後に、國學院大學と観光まちづくり学部への期待が語られた。

吉見氏は、「ポスト成長社会の、古さにこそ新しさがあるという価値は、國學院大學の理念とも共鳴します」と語る。続いて、アートの町おこしを手掛ける石川県珠洲市やIT化を進める徳島県神山町に触れつつ、「かつては新しい動きは東京から起こったが、今、日本で一番新しい動きは、むしろ地方から起こっている」ことを指摘。

そして、「地方からの動きを大きな力に変えていく媒介として、また日本を変えるリーダー養成の場として、『たびまち学部』が果たすべき役割は大きい。私もその一助を果たすことができれば、大変光栄です」と締めくくった。



湯島天神、湯島聖堂、神田明神、ニコライ堂

※1 神田明神、湯島天神、寛永寺、湯島聖堂、ニコライ堂、アッサラムファンデーション

第二部

シンポジウム

「観光まちづくりのリアル、そして未来」

第二部では、「観光まちづくりのリアルそして未来」と題して、3名のプレゼンターによる事例紹介に続き、西村学部長がモデレーターを務め、プレゼンターに吉見氏を交えてのパネルディスカッションが実施された。それぞれの取り組みの共通性と、これからの観光まちづくりについて、活発な議論が交わされた。

地域に引き継がれる 持続可能なデザインを

西村：本日は、熊野、伊勢、遠野という日本の古層にゆかりのあるデザイナー、ツーリズムビューロー代表理事、文化財行政官という、立場の違う方が来られており、いろいろな意見が聞けることが楽しみです。

まずデザイナーの上綱久美子さんに、生なりのデザインを具体化なざる過程でのご苦労を、お聞きしたいです。
上綱：まず、観光案内サインを立てる場所のプライオリティーに気を使いました。例えば、内宮前を筆頭に、外宮やおはらい町はプライオリティーが高い。それらの観光地からちよつと外れた市街地は、プライオリティーが低くなります。

東京は地域の志ある人々の交流の場として、価値が出てくる（吉見）

吉見教授×西村学部長 対談

第一部の後半は、吉見氏と本学部長の西村幸夫による対談を実施した。ポスト成長社会における地方と東京の役割や、その中で観光まちづくり学部役割について、活発な議論が交わされた。

アジアの中で 東京の古層を見直す

まず話題は、東京の歴史資源の特徴から始まった。西村学部長は、世界遺産の審査を務めた経験から、「東アジアの首都中心部には歴史的な世界遺産があるが、東京の世界文化遺産は国立西洋美術館のみ。東京は、日本の伝統文化に重きを置かずにくたさを感じる」と語った。

吉見氏は、東京の場合には、戦災や関東大震災で、多くの古いものが焼けたことを指摘。「戊辰戦争でほとんどが焼き払われた寛永寺の伽藍も、もし残っていたら間違いなく世界遺産。だが、今でも少し見方を変えれば、江戸や明治の痕跡はたくさん見えてくる」と答えた。

地方のネットワークを つなぐ場、東京

続いて、これからの地方と東京との関係についても、活発な議論が交わされた。吉見氏も西村学部長も、現代では、新しい動きは地方から起きていると語る。それを踏まえて西村学部長は、そのような状況下で東京の文化資源の

活用に取り組み続ける苦勞と意義について、吉見氏へ問いかけた。

これに答えて吉見氏は、「たしかに東京は、その巨大さや危機感の低さゆえ、文化資源区のような取り組みが一番難しい都市だと実感する。その反面、東京を変えなくてはいけないと思っている方が、知識人、市民、アーティスト、行政に関わる人など多くのフィールドにいる。だからこそ、いろいろな組織の人が集まる『準脱藩志士連合』みたいなものをつくってあげれば、いずれどこかで維新が起ころうかもしれない」と期待を語る。

さらに西村学部長は、「東京と地方のバランスをいかに取るべきか」と問いかける。それに対して吉見氏は、「これからの東京は、地域のネットワークをつなぐ場として、価値を持っていく」と述べる。今は情報のやり取りも容易で、地方を盛り立てようとする人同士が、地元だけでなく、全国的、グローバルなネットワークをも持ち、世界と地域が直につながることでできる時代だと、両者は語る。

吉見氏は、「江戸が参勤交代で集まった武士たちのネットワークキングの場になったように、東京は、地域の志ある人々の交流の場として、価値が出てくるのではないかと期待を寄せた。

学生主体の 授業を目指す

最後に、対談は「たびまち学部」こ

と観光まちづくり学部が、新たな時代に果たす役割へと及んだ。西村学部長は、社会のスピードが多様化していく新しい時代の中、観光まちづくり学部が、少人数教育などの、新しい教育を模索してきたことに触れる。

これに対して吉見氏は、自身が委員をしていた中央教育審議会が、2018年に発表した「ランドデザイン」の中で、「学修者本位の教育」への転換を打ち出したことに言及。「決して学生がお客様、という意味ではなく、学生が主体的に考え、社会を変えていこうと本気になってくれるような場を、大学につくり出すことがねらい」と語る。

これに対し西村学部長は、「まさにそれを実現するために、われわれは演習という授業をつくった」と応じる。観光まちづくり演習は、学生がグループ作業を通じて、地域の課題の解決策を提案する授業だ。「学生主体で、教員は横で見守り応援する役割」という。この演習の構想に対して、吉見氏も、自身が2017年から1年間、ハーバード大学教授として授業を担当していた時、学修者主体の教育の価値を実感したと語る。「ハーバード大学の授業の中心はTA※1と学生で、プロフェッサーは、後ろの方で見守る役割」だったという。両者は、演習もそのような学生主体の授業を目指したいと、これからの学部教育への期待を述べ、対談は幕を閉じた。



※1 学部学生などへの教育補助業務を行なう大学院生



1熊野本宮大社旧社地 2外国人旅行者
3精神的な文化 4森林環境学習

田辺市熊野ツーリズムビューローの目的は、地域の人々が笑顔で暮らせる地域づくり。観光振興はその手段だという。田辺市は紀伊半島の南西部に位置し、森林面積が多く、人口減少が進んでいる。同ビューローは、世界文化遺産である紀伊山地の霊場と参詣道をキラーコンテンツとして活用しており、地域の暮らしの風景を守ることを重視している。特に、熊野本宮大社旧社地の大斎原は、全ての古道が交わる象徴的な場所であり、観光振興の「精神的支柱」と多田氏は語る。

田辺市内の観光セクションでは役割分担を行っており、同ビューローでは熊野エリア全体の観光情報収集・プロモーションを担当している。基本戦略としては、「ブーム」より「ルーツ」を大切に、「保全・保存」に重点を置き、「個人」にターゲットを絞り、住民の生活への負担が少ない観光を提供する。

欧米豪のFIT（海外個人旅行者）をメインターゲットとし、外国人の感性に合わせた受け入れ地の整備を行っている。熊野の魅力伝えるために、アルファベットを活用したコミュニケーションツールの整備や翻訳作業を行い、受け入れ側の外国人対応のレベルの向上に取り組んでいるという。

その結果、90か国以上から観光客が訪れるようになった。このことが住民の地域への誇りを醸成したと、多田氏は語る。

しかしコロナ禍の影響で、熊野の着地型旅行業の売り上げは大幅に減少した。外国人旅行者が売り上げの9割を占めていたため、組織は困難な状況に立たされた。そこで、日本人旅行者の誘致や教育旅行プロジェクトを展開し、市の協力を得てマーケットチェンジに取り組んだ。多田氏は、インタープリターの養成や官民共創の観光地づくりが成功の秘訣であると考えている。

最後に多田氏は、「私たちのモットーは、責任（Responsible）を持ち、地域と観光客を尊重（Respect）し、経済的な実現可能性（Reality）を担保するという、『3つのR』。これを大切に観光施策を進めていきたい」と締めくくった。

ブームよりルーツへ 持続可能なツーリズムを目指して

一般社団法人 田辺市熊野ツーリズムビューロー
代表理事 多田 稔子氏



れていました。私も仕事で熊野に行くのと、欧米豪からの観光客の多さに驚きます。やはり、海外の方の視点は、地元の方とは違うのでしょうか。

多田…地元で生まれて育つと、比べるものがないので、全てが当たり前にか感じません。熊野の魅力を十分に理解するには、歴史と宗教に関する背景・知識が必要のため、日本人にとってもわかりづらいだけのものかも知れませんが、外国の方はわれわれとは

異なる日常を生きていますから、着眼点も見え方も異なります。

外国人の書いたプレスを読むと、撮っている写真が日本人とまったく違うんです。例えば、障子の棧にフォーカスしていたり。外国人の感性で、外国の常識的な知識を持った方に伝わるように熊野の説明をしてもらうことで、さらに海外の方に魅力が伝わっていると思います。

西村…やはり、そういう方が発信した

ことで、海外の観光客が集まったのでしようね。ところで、海外の個人観光客へとターゲットを絞っておられましたが、その分コロナ禍で大変だったのではないかと思います。

そこで、森林を活用した教育旅行という、新たな道を発見されたんですね。これからインバウンドが戻ってきて、忙しくなった時に、今まで培ってきたマイクローツーリズムを続けていこうとお考えですか。

多田…インバウンドは、すでに戻ってきており、忙しくなっています。ですが今後を考えると、インバウンドだけではリスクです。やはり、きちんと国内の需要も満たしつつ、インバウンドも受け入れたい。できれば50対50ぐらいの割合にしたいと思います。

西村…あと、チャットでコメントが来ていますね。観光地でも、無料の所には人が入るが、安くても入館料を取る所には、全然人が入ってくれないこと

した。

西村…そうなのですね。それから、外の人間として、地元に入る時のご苦労や工夫があるかと思いますが、いかがですか。

上綱…私が伊勢の景観づくりに携わったのは、1990年代から2000年頃です。住民を巻き込んだの景観づくりが、まだ一般的ではない時代でした。ですが、実施設計や建築確認申請などは、地元建築家の方がやりやすい。

しかも生なりのデザインは、その質感を保つためにメンテナンスが必要となる、今で言う持続可能性のあるデザインです。これは地元で渡していかないといけないと、常に感じていました。それがやっとなってきたのが、「お休み処」の設計です。

**熊野の歴史的古層を
日本と世界に伝える**

西村…ありがとうございます。続いて、

田辺市熊野ツーリズムビューローの多田稔子さんに質問です。大斎原という、地域の精神的支柱を見つけたことが、重要なスタート地点だったとお話でした。その合意は、どのように形成されていったのでしょうか。

多田…正直に言いますと、走りながら行きたというのが事実です。言語化できる感覚ではないのですが、何もない空間であるゆえの迫力や、大斎原に全ての古道が集結していることなど

から、支柱として大斎原が浮かび上がってきました。

やはり皆、地域で大事にしているものは違っても、掘り下げていくと、共通の歴史的古層に行きつくのだと思います。地域の方が大事にする歴史を探ることが、観光振興を成功に導く力ではないかと思っています。

西村…また、田辺市熊野ツーリズムビューローは、海外出身の方の目で発信することで、地域の良さを再発見さ



「生なり」のアーバンデザインで、 まちににぎわいと誇りを

デザイナー、design office kk 代表、本学部非常勤講師
上綱 久美子氏

上綱氏は、伊勢市の観光地デザインとまちづくりについて、自身がデザイナーとして関わってきた経験をもとに、「伊勢市生なりのアーバンデザインのその後」というテーマで講演した。

伊勢市は三重県の中東部に位置し、伊勢神宮の鳥居前町として発展してきた。神宮をはじめ、多くの名所・旧跡を有する観光都市でもあり、20年ごとの式年遷宮を節目に、まちのハード整備を行ってきた。

上綱氏と伊勢市の関わりは、当時所属していた株式会社GK設計にて、1991年に伊勢市の街路景観基本計画の策定業務の担当となったことから始まった。計画の中で、市がアーバンデザインの基本理念として掲げたのが、素材の持つ美しさやありのままの純粋な状態を指す「生なり」というキーワードだ。上綱氏らチームは、この「生なり」を取り入れ、経年変化も受け入れられる都市デザインを手がけた。

一つ目の事例は、伊勢市の観光案内サイン。移動のしやすさを担保しながらも、まちと観光資源の魅力伝えるデザインとした。歩行者向けには、誘導サイン「語り石」、案内板「語り壁」、マップなどを、主要な結節点や分岐点に整備した。いずれもまちの景観によく溶け込む、木製や石製のサインだ。オーバーハング型の車両誘導サインも設置した。

もう一つの事例は、内宮おはらい町の石畳整備だ。内宮おはらい町では、1993年の第61回遷宮に向けて、1979年から伊勢市と地元住民と地元企業が三位一体となって、町並みを形成してきた。さまざまな建築様式の基準が作られ、観光客が集まるエリアとして成功をおさめていた。上綱氏は、世古（せこ・細い路地）の舗装整備、伊勢参りで人気のあった参宮街道の遊歩道整備、広場の整備などの、街路景観整備を手がけた。

また、徒歩での回遊性を高めるために、土地の観光、歴史や文化を学べるサインも併設した休憩所「お休み処」をデザイン。こちらは、実施設計を地元の建築家に任せた。

最後に、伊勢のまちづくりの課題として、内宮以外のエリアの回遊性を挙げ、「比較的客足の少ない河崎地区や二見地区にも、歴史的町並みや資源がある。もっと多くの方に訪れてほしい」と熱く語った。



1おはらい町通り
2語り石
3語り壁
4お休み処



住民の手で見つけ、育てる遠野の宝

遠野市文化課・市史編さん室次長（学芸員）
前川 さおり 氏

前川氏は、岩手県遠野市における独自の地域遺産認定制度である「遠野遺産」について紹介した。遠野市は岩手県の中央部に位置し、柳田国男の『遠野物語』の舞台として知られる。遠野の観光の歴史では、高原観光から始まり、『遠野物語』のブームを受けて博物館や伝承園が建設され、昔話まつりなどの文化イベントも開催されるようになった。1995年に、どぶろく特区への認定を受け、濁酒製造などのグリーンツーリズム事業も展開されてきた。最近ではビアツーリズムやサイクルツーリズムなどのマイクロツーリズムが人気となっている。

「遠野遺産」は、指定文化財制度の限界を克服するために作られた。指定文化財制度では、文化財の守り手が所有者と行政の二者しかおらず、所有者が高齢化し、市の財政が苦しい中では、文化財を守っていくのは困難という問題がある。地域ぐるみで文化資源を守る仕組みが求められていた。

遠野遺産は地域の人々の主観を重視し、地域の人々が愛着を持つものを遺産として認定している。認定の条件は、遠野らしい魅力を示していること、市民の手で保護・活用されること、地域づくりの団体からの推薦があること。年に1回の公募が行われ、適切なものは市長によって認定される。

現在、169件の遠野遺産が認定されており、有形・無形・自然・複合遺産の4形態がある。

遠野遺産の保護・活用には、市内11地区に年間300万円ずつ配分される、「みんなで築く遠野推進事業」補助金が利用できる。活用実績としては、コロナ禍の中で考案されたサイクルツーリズム（ちゃりぶら）がある。遠野遺産や棚田などの景観、地域の人々とのふれあいを楽しみながら巡るプランだ。

行政としては、市民に楽しんでもらうことを重視し、看板設置やパンフレットの配布、観光ガイド研修や、ケーブルテレビでの発信を手がける。今後は、インバウンド向けの観光ガイド育成や情報発信、IT化などの課題に取り組みたいという。



1 遠野遺産ポスター 2 語り部 3 遠野遺産の看板 4 サイクルツーリズム

が悩みだそうです。そういう問題は、欧米豪などの海外の方にはあまり関係ないのででしょうか。

多田…たしかに近くから来る方は、それほどお金は使いませんよね。ですが、遠くから来る方はお金を使うし、むしろ、せっかく来たのだから使いたいと思っています。

西村…そういう方々にきちんと対応すれば、よりクオリティの高い観光を提供できそうですね。

地域資源を掘り起こす 遠野遺産認定制度

西村…ありがとうございます。次は遠野市文化課の前川さおりさんにお伺いします。従来の文化財と比べると、地域の人の主観が基準となる「遠野遺産」は、斬新ですね。認定のしかたと地域への効果について、詳しくお聞かせください。

古さにこそ未来を見る 21世紀的な視点

西村…吉見先生、ここまでお聞きになったの感想をお願いします。

吉見…この第二部はすごく巧みに組まれているなど、感嘆しました。

まず、伊勢と熊野と遠野の3つの共通性を語ることは、日本の古層を語ることに等しい。さらに、プレゼンターの皆様が専門とされる、都市デザイン、ツーリズム、文化財行政の3つの分野からの視点がつながると、まさに日本の古層に対して、この観光まちづくり学部が何をやるかとしているかが見えてきます。

さらに、私の取り組む上野や神田は、江戸・東京の古層なので、私たち4人は皆、「古層の再生」を目指しているのです。これは、古さにこそ未来を見ていくという、21世紀的な視点だと思っています。そのうえで、皆さんへコメントをさせていただきます。

まず、前川さんのお話は、『遠野物語』を、地域のまちづくりと観光へ生かすというベクトルでした。今度は、この物語を、世界に向けてどう発信していくのかという、もう一つのベクトルがあっても良いと思います。

例えば、先ほど国立国会図書館が使用するデータベース「ジャパンサーチ」で「遠野」と検索したところ、なんと1万2577件のコンテンツがヒットしました（2022年11月15日時点）。

どうかを基準に、年代の新旧や有形無形を問わず、認定しています。そこに遠野遺産認定調査委員会の客観的な視点を加えることによって、普遍的な遺産となり得るかどうかを判断しています。

例えば、有形遺産の審査であれば、委員会調査の時に、手入れが行き届いているかを確認したり、地元の方から聞き取りをしたりして、本当に地域の人に愛されている所かを見極めます。

この1万件以上の文化資源をつなぐ物語を、地域の方やボランティアと協力しながら作ることで、さらに発信力が高まるのではないかと期待します。

次に、多田さんのお話を聞き、以前私がキューバを訪れた時、非常に知的レベルの高い歴史ツーリズムを体験したことを思い出しました。

おそらく、高単価で少人数を相手にしたツーリズムは、世界中の歴史的文化遺産を持つ地域で試みられているはずです。ですから、豊かな歴史資源と自然資源を持つ熊野も、まずは世界中の教養の高い観光客をターゲットにした、高単価の観光を發展させて、だんだん国内にも広げていく方法がいいのではないかと考えました。

最後に、上綱さんへのコメントです。僕は昔、伊勢参りのことを調べていた時代があります。その際、伊勢に行くとき奇跡的なことが起こるといって仰が、多くの日本の大衆の間、特に女性と子どもに共有されていたことに、大変興味を持ちました。

このことから、伊勢のまちづくりにおいて、女性たちと伊勢というジェンダー面でのつながりなど、まだ考えるべきことがあると感じました。

前川…遠野は豊富な文化資源に恵まれているものの、それを料理する方法を、地域の人々はまだ十分に知りません。だからこそ、いろいろな料理のしかたを知っている外部の方や、市民の方の力を借りながら、発信の仕組みを作っ

ていきたいです。民間の観光、都市デザインと文化遺産保全の3つが一緒になれば、それが可能になると期待しています。

多田…熊野は、いろいろな文化や宗教を受け入れてきた地域です。ですが、世界遺産制度やサステナブルなど、いまの熊野の観光を取り巻くものは、西洋の概念で成り立っています。

そのことをよく理解したうえで、自分たちの日本の良さや世界に伝える手法づくりが、大事だと考えています。上綱…デザインの意味も変容しつつあり、ハード整備としての有形の物から、無形のデザインへと広がってきています。観光まちづくりのフィールドでも、仕組みづくりや情報発信など、上流でプロセスのデザインから一緒にやっていけたら、もっと新しいものが生まれるのではないかと、思っています。

西村…ありがとうございます。きょうのテーマは、「観光まちづくりのリアル、そして未来」でした。皆さんのお話からは、未来は過去の中にこそあり、それを見つめ直すこそが、われわれのモットーである「地域を見つめる」ことなのだと感じました。

それが地域を動かす、次の時代を動かすことにつながっていく。その過程に、われわれの学部も貢献していきたいと思っています。

パネリストの皆さん、ありがとうございました。

（文責 稲葉 あや香）

「地域資源を生かした吉野町のまちづくり」

開催日: 2022(令和4)年10月12日
 講師: 中井 章太氏 吉野町長(奈良県吉野郡)

第5回の観光まちづくりカフェは、奈良県吉野郡吉野町から町長の中井章太氏を招いて開催された。

第1部の講演「地域資源を生かした吉野町のまちづくり」では、まず、家業である「山守^{なかしん}」の7代目であり、吉野材の生産事業企業「中神木材」の社長でもあると自己紹介をした。吉野は、500年前から人工林を造成し、特徴的な密植植林方法を用いている。密植とは、苗木の間隔を狭く植える植林方法で、一般的には1haあたり3,000~5,000本の植林をすることで、吉野では、約3倍の8,000~12,000本の植林を行っている。加えて、間伐回数が多い多間伐、そして伐採される林齢が100~200年と一般的な林齢より長い長伐期施業により、木目の細か

い高品質な杉を生み出すことができ、天然林に近い木質となっていると紹介した。

また、吉野町の大きな課題である、高齢化と空き家の問題への対応策や、観光資源である吉野山の桜に関する取り組みについても述べた。

第2部のディスカッションは、吉野町長とのつながりが深い南雲勝志教授が進行役を務めた。下村彰男教授は、吉野町が、桜の観光地と、吉野杉を産出する林業地であることの二面性について触れ、山守でありつつも町長となった中井氏に、その全く異なる二つの面の結びつけ方を質問した。中井氏は、桜の繁忙期と、他の季節の閑散期に触れ、信仰と産業を来訪者にしっかりと伝えることで、二つの面をうまくつなげられると答えた。児玉

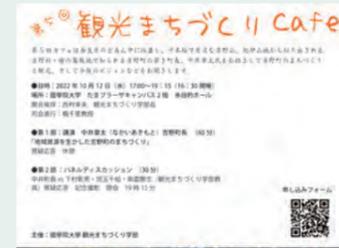
千絵専任講師からは、山守という存在が、単なる経済的側面から見た山の所有者という形だけではない、大局観を持ち社会の中での役割を担っている点がユニークだとの発言があった。

第1部の講演を聴いて、早速友人と吉野町への旅行計画を立て始めたという学生からは、お薦めのスポットや、地域の人と触れ合える場所などについての質問があった。中井氏は、ゲストハウスでの宿泊や地域おこし協力隊が運営している食堂への訪問を勧め、観光まちづくりを知る機会になると回答した。その他の学生や教員からも多くの質問がなされ、参加者は吉野町やその取り組みへの理解が一層深まった。

※山林監守のこと



この学生は、吉野町に魅力を感じ、早速旅行計画を立て始めたという



第5回カフェフライヤー

第5回～第7回「観光まちづくりカフェ」開催報告

2022(令和4)年10月から2023(令和5)年6月にかけて、計3回の「観光まちづくりカフェ」が開催された。教職員や学生のみならず、たまプラーザキャンパス近隣住民が参加した回もあり、一層のにぎわいを見せた。

(文責: 仲野 潤一)



「伝統行事の継承と地域社会」

開催日: 2023(令和5)年2月22日
 講師: 相川 七瀬氏 歌手・石堂 和博氏 南種子町教育委員会 学芸員(鹿児島県熊毛郡)

第6回のカフェは、歌手の相川七瀬氏、鹿児島県熊毛郡南種子町から同町教育委員会学芸員の石堂和博氏が講師として登壇した。この回は、タウンニュース横浜市青葉区版により周知がなされ、大学近隣住民も参加しての開催となった。

講演「赤米行事をめぐる現状と継承への取り組み」は、相川氏が赤米に興味を持ったきっかけから語られた。相川氏は、20代から神道に興味を持ち、対馬で行われるコンサートの前後に、対馬の神社を調べて回った。その際に偶然、多久頭神社の赤米神田で出会った赤米に感動。地元住民との話から赤米を神格化する神事や、その継承問題を知ることになった。行政や地域住民が赤米神事をサポートしない理由など、素朴に疑問を持ち、コンサートのMCでこの問題につい

て語った。赤米に魅了された相川氏は、対馬に通い、稲刈りなどにも参加し、赤米大使にも任命される。さらに、赤米の勉強を通じて、種子島や岡山県総社市でも赤米神事があることを知り、それぞれの赤米神田と神社を訪ねることになった。この経験が石堂氏との出会いにつながっている。相川氏は、赤米神事の継承の難しさについて、神事の決まり事を守ろうとするあまり、担い手への要求が社会の現状と乖離しているとの問題を指摘した。

次に、石堂氏は、南種子町の宝満神社の赤米神事である御田植祭について説明した。赤米神事を実施している各地との赤米文化交流によって、南種子町の赤米神事継承に変化の兆しが見られると述べた。離島の伝統行事の継承は、都市部からのボランティア不足などの課題があっ



2023(令和5)年で退官される小川教授からの白熱した話題提供を中心に、トークセッションは大いに盛り上がった

たが、赤米文化交流により、地域外の注目を集め、トップダウン・ボトムアップの双方からの行事の継承の意欲が高まる効果があると強調した。交流の成果として、「地域の祭を継承するかしないかは、保存会だけでなく地域全体で考えるべき」という認識が広がったと述べた。

トークセッションは文化庁調査官時代に南種子町の赤米神事を調査した石垣悟准教授が進行役を務めた。田植祭は世界的に見れば特殊な作物の育て方であり、それが神事として残っていると石垣准教授が説明。また、米食が一般的になったのは戦後からであり、かつては白ではな

く、赤や黒や緑など、さまざまな色の米を合わせて米として取り扱われていたと指摘した。赤米は気候変動に強く収量が安定していたため、食用として適していたが、時代の変遷とともに、味の好みが変わり、赤米は主流でなくなったと述べた。このような前提知識を基に参加者はトークセッションを聴くことができた。小川直之文学部教授(当時)からは伝統行事の継承への熱い思い、また、それを成り立たせるための強い理念や確実な手法が語られ、相川氏、石堂氏、小林稔教授、松本貴文准教授により豊富な知見や異なる視点からの議論が繰り広げられた。



種子島からロケットに乗ってきたという、学芸員の石堂氏による赤米神事継承のための様々な取り組みについての発表の様子

「重伝建での“暮らし”から“観光まちづくり”を考える」

開催日: 2023(令和5)年6月28日
 講師: 山内 大輔氏 ゲストハウス「内子晴れ」オーナー(愛媛県喜多郡内子町)

第7回のカフェは、愛媛・内子町のゲストハウス「内子晴れ」のオーナーである、山内大輔氏が講師として登壇した。

第1部では、米田誠司教授基礎ゼミナール[※]で内子町フィールドワークを行った学生が登壇し、内子町の町並み保存の概要を発表した。1975年に始まった伝統的建造物群保存地区制度の発足をきっかけに、一軒一軒の家を訪れて町並み保存の重要性を訴え、住民の賛同を取り付けた元内子町職員の岡田文淑氏の活動を紹介した。1976年には内子の町並み保存会が結成され、1982年には全国で18番目の重要伝統的建造物群保存地区に登録された。学生は、町並み保存の持続性は努力によるものだ実感したと述べた。講師の山内氏はじめ、内子に魅力を感じる移住者が多い一方で、地元住民のまちづくりへの関心が低いと問題提起し、小学校での町職員によるまちづくり出張授業を、高校における地域学習カリキュラムへと展開するなどの提案を行った。

山内氏の講演では、自身の経験を基に、地域に根付く観光やまちづくりの重要性が語られた。山内氏は、24歳で会社を退職し、世界旅行で地域にとけこみ楽しさを見いだしたという。その後、四国遍路での人々との出会いから四国への移住を考え、地域おこし協力隊に応募し内子町への移住を実行した。協力隊一期生として、山間部の盛り上げ担当となった山内氏は、そこで美しい山林や里の景色、そしてそれを維持している一人一人の営みに気付く。このことを、外部に伝える役割を果たすために、伝建地区でゲストハウスを開業。伝建地区の物件を選んだ

のは、古民家が好きという感覚と、人通りが多く里山につなげる拠点として好立地との考えからだった。内子は若い移住者が増えているが、コロナの影響もあり地元住民間の交流の場が不足していると考え、移住者と地元住民の交流を深めるイベントをいくつか企画。その後、伝建地区の入り口にある工場跡を官民一体で広場に作るプロジェクトが発足し、住民、移住者、役場職員、建築関係の人々と理想の広場についての議論が始まったことが、皆が町のビジョンに目を向けるきっかけになったという。山内氏は、地域を深く知るとともに、地域の未来を見据えて行動することで、地元住民にも、移住者にも「この町並みだからここにいる」という意識を育てることの重要性を強調した。

第2部では、山内氏に加え、米田教授と、基礎ゼミ生によるトークセッションが行われた。学生は、内子町での体験を基に、地元でまちづくりを行うための手がかりが見えたという。また、異なる地域や背景を持つ人々との関係性を築くことの価値や楽しさの重要性にも気付いたという。参加した学生との質疑応答も交わされ、大変盛り上がったカフェとなった。

※基礎ゼミナール: 観光まちづくり学部1年後期~2年前期に履修するゼミナールで、学部教員の専門性に沿ったフィールドワーク、制作、輪読などを行う形式の授業



基礎ゼミ生の内子町に対する素直な感想に聞き入る山内氏

地域マネジメント研究センター (CMI) の活動

「観光まちづくりライブラリー」



館内展示の様子

たまプラーザキャンパス「若木21」1階のCMI内にある「観光まちづくりライブラリー」(以下、ライブラリー)は、本学部における学びおよび観光まちづくりに関する専門図書・資料や情報を収集・保存し提供する専門ライブラリーです。國學院大學の学生・教職員が主な利用対象で、司書資格を有する研究員をはじめとするスタッフが学生などの資料相談(レファレンス)にも対応しています。

蔵書は「渋谷図書館」「たまプラーザ図書館」と連携して収集し、ライブラリーでは専門図書約3000冊、専門雑誌約140誌を目標に収集を進めています。

館内のテーブルや椅子、一部書架は、包括連携協定を結んだ岐阜県高山市の飛騨家具メーカーの製品で、無垢の木の温もりを感じながらゆったりと閲覧ができます。

ライブラリーでは、教員図書や企画展示、



専門図書・雑誌が排架された集密書架(左)と雑誌架(右)

- ◆ 利用案内
 - ◆ 利用できる方
 - 國學院大學の学生教職員
 - ◆ 開館時間
 - 平日10時～17時
 - 通年開館(土日祝日は休館)
 - *大学の夏休み・年末年始、春休み期間等は部休館する場合あり
 - ◆ 資料の閲覧・貸出
 - ライブラリー内での閲覧は自由です
 - 貸出は同時5冊まで/人
 - *貸出は資料・辞典・事典・統計・白書等、雑誌等はライブラリー内のみ閲覧可

包括連携協定を結んだ地域のパネル紹介やモニターでの観光地の映像紹介など、観光まちづくりに関するさまざまな情報発信も行っており、今後は企画展示やライブラリーイベントも充実させていく予定です。

ライブラリーのコレクション紹介

所蔵図書には、学部教育に関わる基本書、全集、レファレンス資料(辞典・事典等)、シラバス図書、教員図書、ガイドブック、包括連携地域関連資料など、また雑誌には、観光・まちづくりに関する主要雑誌(学術誌を含む)や全国各地の地域情報誌(ローカル誌)などがあります。

このうち学部教育や研究の参考となる基本書は、「KM(観光まちづくり)分類」という独自分類により、学部カリキュラムの体系に合わせて資料を排架しています。

2023年3月には、本学部の導入講義のために編さんした入門テキスト『「観光まちづくり」のための地域の見方・調べ方・考え方』が基本書に加わりました。

その他、全国各地の歴史的町並みの保全や観光振興に関する調査計画書など専門性の高い資料も収集しています。

KM分類	
KM0	國學院関係・教員図書
KM1	I類:社会
KM2	II類:資源
KM3	III類:政策・計画
KM4	IV類:交流・産業
KM5	メソッド
KM6	ガイドブック・地図
KM7	統計・調査計画資料

「観光まちづくり」のための地域の見方・調べ方・考え方

國學院大學
地域マネジメント研究センター 編
朝倉書店、2023年3月 152P
ISBN : 9784254265521



本学部教授陣が執筆。「地域を見つめる」(調査)、「地域を動かす」(実践)の二部構成により、観光を主軸に置いたまちづくりが何を指し、どのように進めるべきかを解説。地域の見方・調べ方にとどまらず、地域の個性をどのように評価し、生かしていくかという「考え方」まで丁寧に示しており、観光まちづくりを学ぶ学生だけでなく、地域の実践者にもぜひ一読いただきたい一冊です(本誌P36～41で執筆者の教員の座談会を掲載)。

全国各地の調査計画資料

歴史的町並みや伝統的建造物群保存地区や文化的景観の保護・保存計画、都道府県・市区町村が策定した観光振興計画などは、観光まちづくりの実践資料として大変貴重です。ライブラリーでは古い資料も含めて、全国の代表的な調査計画資料を収集しています。



観光まちづくりライブラリー <https://www.kokugakuin.ac.jp/education/fd/tourism/about/library>



2022年12月17日(土)内子町役場での締結式。(左)小野植正久内子町長、(右)針本正行本学長



2022年12月19日(月)由布市役所での締結式。(右)相馬尊重由布市長、(左)針本正行本学長



2023年5月16日(木)栃木市役所での締結式。左から東武トップツアーズ(株)竜江義玄取締役執行役員、大川秀子栃木市長、西村幸夫本学部長、東武鉄道(株)本保芳明執行役員待遇

包括連携地域との交流

本学部とCMIでは、魅力ある観光まちづくりを実践している地域・団体と包括連携協定を結び、学生・教員との交流や共同研究を実施しています。連携地域は岐阜県高山市(P32)33の「地域連携最前線」に活動報告を掲載、千葉県香取市佐原地区、三重県鳥羽市で、2022年12月、新たに大分県由布市と愛媛県内子町とも協定を締結しました。愛媛県内子町には、2023年2月に米田誠司教授の基礎ゼミ生30名が2班に分かれ、それぞれ3泊4日で滞在し、町内でフィールドワークを行いました。内子町の観光まちづくりキーパーソンへのインタビューや、町民の方々とのお話を通じて、内子町への理解を深め、ゼミの活動報告会では今後も内子町に興味・関心を持ち続けていきたいとのコメントがあり、継続的な交流が行われる見込みです(P28)にゼミ生が宿泊した内子町ゲストハウス「内子晴れ」オーナー山内大輔氏をゲスト講師に招聘した第7回「観光まちづくりカフェ」の報告記事を掲載。

また、鳥羽市では、まちなかへのミニライブラリーの設置を通して、鳥羽うみ文化の発信と交流の場の創出を目指す「鳥羽うみ文化ライブラリー」プロジェクトの活動がスタートし、CMIの「観光まちづくりライブラリー」と連携した取り組みが進められています。

包括連携協定締結地域とは、2024年度からスタートする正課カリキュラム「観光まちづくりインターンシップ」受講生の受け入れや新たな共同研究を開始するなど、密な連携を進めています。

新たな共同研究・事業の開始

2023年5月16日(火)、栃木県栃木市、東武鉄道株式会社、東武トップツアーズ株式会社と本学

部の4者による「持続可能な『観光まちづくり』に関する協定書」が締結されました。蔵の街エリアを主な研究対象地域に設定し、歴史的建造物等の観光活用や持続可能なまちづくりの仕組みに関する研究活動を、産官学共同で行います。今後、本共同研究パートナー4者による定期的な検討会議の開催や、地域住民へのヒアリング調査、および蔵の街エリアにおける蔵の活用調査などが予定されています。

また、一般社団法人日本自動車連盟神奈川支部(JAF神奈川支部)、神奈川県国際文化観光局観光課と本学部との、産学官共同・連携事業の実施に関する覚書が、2023年5月25日(木)に締結されました。本事業は、参画する3者の産学官連携において、神奈川県内の魅力的なスポットを発掘し、観光振興や、本学部のインターンシップ参加による教育を目的としています。具体的には、インターンシップ生が、神奈川県秦野市、厚木市、伊勢原市、愛川町、清川村エリアでフィールドワークを行い、魅力の発見や写真撮影、写真コンテスト、ガイドブックの発行などを予定しています。2023年9月19日(火)のインターンシップのオリエンテーションから活動を開始しました。

CMIは、本学部と地域・社会を結び、両者の発展に寄与し、観光を軸とした持続可能な魅力ある地域づくりに貢献することを目的に活動しています。今後も国内外を問わず、各地域との連携を推進していきます。



2023年9月19日(火)インターンシップのオリエンテーション

地域連携最前線

田谷 孝幸

地域マネジメント研究センター客員研究員／元高山市企画部長

本学部と包括連携協定を結んだ地域では、教員・学生との交流や共同研究などのさまざまな活動が動き出しています。本号では、共同研究を開始して3年目を迎え、持続可能な観光まちづくりに向け研究に取り組む岐阜県高山市を紹介いたします。

国際観光都市 飛騨高山が抱える課題

岐阜県北部に位置する高山市は、1936（昭和11）年に市制施行され、2005（平成17）年には周辺9町村との合併により、日本一広い市となりました（東京都とはほぼ同じ面積）。東西約81km、南北約55kmの同市は、乗鞍岳をはじめ、北アルプスなどの自然、高山祭などの伝統、飛騨牛などの食が有名です。市内各地は、暮らしも歴史も地域資源も産業形態も規模も異なる中で、持続可能なまちづくりを模索しています。

主産業である観光では、観光地「飛騨高山」として、コロナ禍前は、観光入込客数年間470万人超、外国人観光客年間60万人超（宿泊）と、国内有数の国際観光都市にまで成長しました。しかし、観光客が中心市街地の古い町並みに集中しており、合併し一層豊かになった自然や農山村など、その他の魅力的な地域資源が十分に生かされていない、市内経済の波及効果が十分ではないなどの課題がありました。さらに、コロナ禍によって大幅な来訪者減となり、大打撃を受けました。

最近では、回復傾向にあるものの、従業員

の確保が難しい状況から、宿泊施設の受け入れ制限や、食事を提供しない宿の増加により、いわゆる夕食難民が発生している状況です。さらに、マイカーによる個人旅行者が増加したことによる駐車場不足への対応など、新たな課題にも直面しています。

本学と高山市との連携の背景・経緯

前述のような高山市の抱えるさまざまな課題を解決するうえで、産学の連携は重要ですが、飛騨地域には4年制大学がありません。そこで、同市は、大学連携の総合的な推進を図るため、2017（平成29）年に、一般財団法人飛騨高山大学連携センターを設立し、国内外の大学との共同研究および市内における活動の支援を行っています。また同市は、2021（令和3）年5月に、「世界を魅了し続ける『国際観光都市 飛騨高山』の実現」を掲げ、国からSDGs 未来都市に選定され、取り組み事業のひとつとして、産学連携の推進を位置付けました。

こうした中、同市と國學院大学観光まちづくり学部は、2021（令和3）年、持続可能な観光まちづくりに関する調査研究に取り組むことになり、学部設置に先駆け



五色ヶ原の森での現地調査

て同年7月には、同市と共同研究の実施に関する覚書を取り交わしました。本学部設置後の2022（令和4）年4月には、同市と本学の包括連携協定を締結しました。こうした取り組みがスムーズに行われた背景には、学部長の西村幸夫教授が、同市のまちづくりに40年余りにわたって関わっ

地域の物語を探る

観光まちづくり学部 准教授 藤岡麻理子

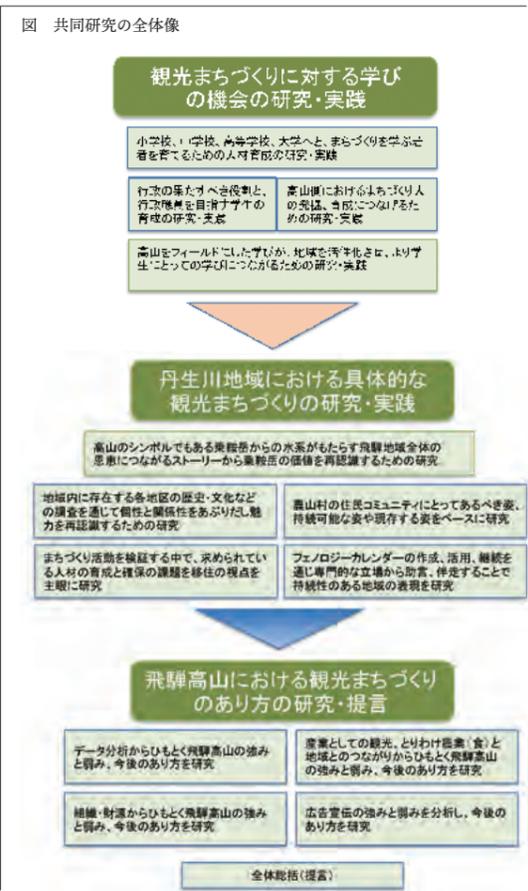
丹生川地域の国道を車で走ると、田畑やビニールハウスが広がる農村の風景や、谷間の集落、山林、さらには遠くの飛騨の山々などが目に映ります。それは、日本の中山間地域の風景であり、またおそらくは地域の人々にとっては日常の当たり前の風景なのだと思います。一方、それは何世代にもわたる人々の暮らしの中で形成されてきた風景でもあり、その中には当たり前であるがゆえに気づかれなかった表情や物語があるのではないか、そしてそれが地域の新たな魅力につながるのではないかと、いつも考えをめぐらしています。そのような思いのもと、現在、いくつかの異なる視点から丹生川地域を見つめる試みを進めています。ひとつの視点が水環境です。丹生川地域では集落の多くが川沿いに形成され、用水路やため池といった水利施設をつくり、暮らしが営まれてきました。水をたどって歩いていくと、土地に根ざした暮らしのカタチが映し出された、場所場所の風景に出会います。水を軸に地域の成り立ちや地域構造を捉えることで、地域の新たな姿が見えてくるのではないかと考えています。一方、農業が盛んになる以前は、鉱業、養蚕業、木材関連業等が営まれていました。そうした過去の生業に着目して地域の方々にお話を伺っていくと、丹生川地域と周辺地域の関係性や丹生川地域内の集落間の関係性なども浮かび上がり、集落ごとの個性や今日の行政の中心としないさまざまな中心性への関心が湧いてきます。丹生川地域では人々がどのようにして生活を営み、地域を発展させてきたのか。土地と暮らしの歴史を探りながら、地域づくりの源となる地域性の検討を続けていきたいと思っています。



個人宅にてヒアリングをする様子

観光メディア、観光統計、まちづくり、風景計画、都市農村交流、農村社会学、文化遺産などを専門とする10名の教員に、現地駐在の客員研究員を加えた11名のさまざまな専門分野のメンバーで共同研究を開始しました。

活動内容は、現地踏査に加え、観光関連事業者や行政関係者へのヒアリング、丹生川地域の個別集落やイベント開催時の現地調査など多岐にわたります。また、2022（令



共同研究の成果と課題

これまで2年間の共同研究は、コロナ禍の影響もあり、まだ十分な成果を得るまでには至っていません。また、現段階では、教員それぞれの専門分野や集落の特徴に着目した研究が中心であるため、地元にとって活動が見えにくいことも否定できません。それでも、丹生川地域では、乗鞍岳や五色ヶ原の森、木地屋溪谷などの自然や、農山村の暮らし、農業などの生業、丹生川マールシエなどのイベントを通じて、地域資源の付加価値を高め、地域の魅力を再認識し、新たな観光を考える若者らの動きも興味深い研究対象となっています。また、中高生は、「答えを見つけないでいい、問いを探すと」との西村教授の講義に触発されています。今後、地域としては、教員に大学生も加わり、実践の場において、住民と共同しての活動が期待されています。

今年度は、3カ年の調査研究から、これからの観光まちづくりに関して、高山市にとって大切にすべきことを、提言の形でまとめる予定としています。また、本学部の教員による、持続可能な観光まちづくりの概論を、地域住民が学ぶ機会を作ることにも予定しています。

持続可能な地域コミュニティの実現に向けて

観光まちづくり学部 准教授 松本貴文

今回の共同研究における私の役割は、持続可能な地域コミュニティの実現に向けて、どのような観光まちづくりへの取り組みが求められているのかを明らかにすることです。そこで、これまで丹生川地域の町内会役員の方々を中心に、地域コミュニティの活動内容や歴史的变化などについてインタビュー調査を続けてきました。そのなかからみてきたことのひとつは、丹生川地域では少子高齢化の進んだ小規模集落であっても、道路の直列りや用水路の澄深（しゅんせ）、神社のお祭りなどの地域活動が継続されており、地域コミュニティが地域環境や地域文化を保全する機能をしっかりと維持していることです。また、そうした地域活動に、丹生川地域の他の集落や高山市内の他の地域に住むおきさんたちなどが関わっていることも分かってきました。地域活動に住民以外の参加を認めていくことは、時代の変化に合わせて、地域コミュニティを持続可能なものにしていくという工夫のひとつといえるのではないかと考えています。

とはいえ、集落によっては、人口減少や少子高齢化によって将来的に地域コミュニティの活動を維持することが困難になるのを見通しもあります。今後は、こうした課題の解決に、観光や交流をどう生かすことができるのかについて、さらに研究を進めたいと考えています。



飛騨高山学会発表



斐太高等学校での講義

同市と本学部では、来年度以降も活動を継続していく方向で調整を始めています。この共同研究が、地域連携モデルのひとつとなるように、地域とともに取り組んでいきます。

観光まちづくり学部 専任教員紹介



※1



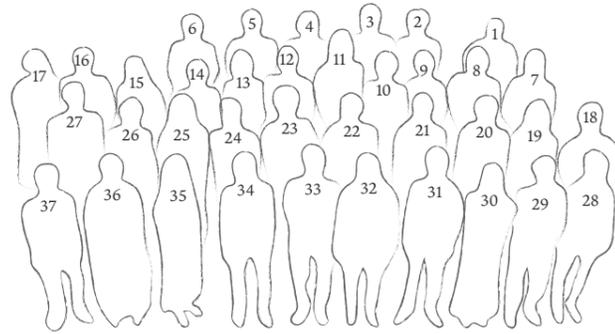
※2



※3

この学部には、さまざまな分野での
研究実績や現場経験を
豊富に持つ教員がそろっています。
学生自身の興味関心に合う
専門分野を持った教員の下で、
学問にいそしめることが
本学部の特色の一つです。
氏名の後に各教員の専門分野を
記載しています。

フィールドワークの様子
※1：群馬県草津町 草津温泉
※2：千葉県南房総市 道の駅とみうら枇杷倶楽部
※3：埼玉県川口市 鋳物工場



6 小林 稔 教授
KOBAYASHI, Minoru
民俗学、文化財保護論

5 大門 創 准教授
DAIMON, Hajime
都市計画、交通計画

4 米田 誠司 教授
YONEDA, Seiji
公共政策、観光政策

3 塩谷 英生 教授
SHIOYA, Hideo
観光統計、観光経済、
旅行市場分析

2 松本 貴文 准教授
MATSUMOTO, Takafumi
農村社会学、地域社会学

1 石垣 悟 准教授
ISHIGAKI, Satoru
民俗学、博物館学、
文化財保護論

7 下間 久美子 教授
SHIMOTSUMA, Kumiko
文化財保護、都市保全、
文化的景観

8 梅川 智也 教授
UMEKAWA, Tomoya
観光地経営、観光計画、
観光政策

9 楓 千里 教授
KAJIDE, Chisato
地域の観光情報メディア

18 小林 裕和 教授
KOBAYASHI, Hirokazu
観光学、観光イノベーション、
観光DX、持続可

19 潘 梦斐 助教
PAN, Mengfei
文化社会学、
近代アジア美術、
ミュージアム・スタディーズ

20 清野 隆 准教授
SEINO, Takashi
観光経営論、
観光マーケティング

31 嵩 和雄 准教授
KASAMI, Kazuo
地域計画、都市農村交流、
移住・定住

17 児玉 千絵 専任講師
KODAMA, Chie
都市計画、都市デザイン、
ストックマネジメント

16 金 今善 准教授
KIM, Guensun
地方自治論、市民参加論

15 楊 惠巨 専任講師
YANG, Hui-Hsuan
都市保全、都市デザイン、
ランドスケープデザイン

14 石山 千代 准教授
ISHIYAMA, Chiyo
地域デザイン、観光計画、
歴史的環境保全

13 藤岡 麻理子 准教授
FUJIOKA, Mariko
文化遺産学、
歴史的環境保全

12 山島 有喜 助手
YAMASHIMA, Yuki
風景計画学、造園学、
観光計画、都市緑地

11 南雲 勝志 教授
NAGUMO, Katsushi
地域と公共デザイン、
地域と杉のデザイン

10 石本 東生 教授
ISHIMOTO, Tohsei
欧州の観光政策、
文化観光

21 井門 隆夫 教授
IKADO, Takao
観光経営論、
観光マーケティング

22 圓山 王国 助手
MARUYAMA, Oukoku
都市計画、多文化共生

23 西村 幸夫 教授
NISHIMURA, Yukio
都市計画、都市保全計画、
都市景観計画

24 黒本 剛史 助手
KURUMOTO, Takeshi
都市計画、建築学、
町並み保全

25 劉 銘 助手
LIU, Ming
造園学、風景計画学、
ランドスケープデザイン

26 吉見 俊哉 教授
YOSHIMI, Shunya
社会学、都市論、
メディア論

27 ジョルダン・サンド 教授
SAND, Jordan
近代日本史、建築史

28 中川 雄大 助手
NAKAGAWA, Yūdai
社会学、都市研究

36 椎原 晶子 教授
SHIHARA, Akiko
都市計画、建物保存再生、
エリアアート

35 河 隼 珍 准教授
HA, Kyungjin
社会学、DR、
コミュニケーション

37 浅野 聡 教授
ASANO, Satoshi
都市計画、景観計画、
防災・復興まちづくり

執筆者に聞く！ 教科書の読み方・使い方

第2回 教員座談会

2022年(令和4)年にスタートした「観光まちづくり学部」も2年目を迎えました。2年生からの必修科目「観光まちづくり演習」で使用する教科書『観光まちづくりのための地域の見方・考え方・調べ方』を執筆した16名の教員の中から3人の教員にそれぞれのパートの内容を詳しく聞きました。

文：小林裕和 観光まちづくり学部教授

司会：今日は「観光まちづくり」のための地域の見方・調べ方・考え方」の3人の執筆者にお越しいただき、本学部の助手3人から、執筆の意図や読みどころなどをお伺いします。よろしくお願いたします。

観光まちづくりは身近なところに

●山：まず、先生方が執筆を担当されたパートの概要や読みどころのご紹介をお願いします。

浅野：担当した第II部第11章は災害に特化した内容です。石山千代先生と2人で執筆しました。観光まちづくりの取り組みを進めるにあたって、下地の部分として必要な防災・災害情報という位置付けが、第11章の特徴かと思えます。

●山：具体的にはどのような内容でしょうか。

浅野：まず前半の部分ですが、観光まちづくりで災害に備えることがなぜ必要なのかということ。次に、日本の社会で用いられている災害情報にはどのようなものがあるかを紹介しています。普段から触れる機会が多い災害情報ですが、風水害と地震の情報では発表される内容やタイミングが違うなど、あまり区別ができていないのが現実です。大きく風水害、地震、津波といった情報に分けて、気象庁の情報発表の仕方や、その受け取り方を解説しました。

●山：たしかに知っておきたいですね。

浅野：後半は、そういった災害情報を活用して観光まちづくりにどのように備えるか、また実際の対策については、それぞれの観光地において想定される災害が発生し、災害情報が発せられた後の時間軸に沿った対応策をまとめました。具体的な事例として伊豆市、京都市を取



洪水ハザードマップ (横浜市作成のものを筆者が加工)

警戒レベル	市民の対応	気象庁等の情報	5段階
5	命の危険 直ちに安全確保！ ・すでに発生している、または発生が極めて危険な状況に陥り、被害が拡大している可能性がある。	大雨 特別警戒 冠水発生情報	5段階
4	命の危険 直ちに安全確保！ ・被害が拡大している、または発生が極めて危険な状況に陥り、被害が拡大している可能性がある。	大雨 特別警戒 冠水発生情報	4段階
3	命の危険 直ちに安全確保！ ・被害が拡大している、または発生が極めて危険な状況に陥り、被害が拡大している可能性がある。	大雨 特別警戒 冠水発生情報	3段階
2	命の危険 直ちに安全確保！ ・被害が拡大している、または発生が極めて危険な状況に陥り、被害が拡大している可能性がある。	大雨 特別警戒 冠水発生情報	2段階
1	命の危険 直ちに安全確保！ ・被害が拡大している、または発生が極めて危険な状況に陥り、被害が拡大している可能性がある。	大雨 特別警戒 冠水発生情報	1段階

防災気象情報と警戒レベル (気象庁 HP)



地震情報の発表タイミング (地震と津波、気象庁)



「観光まちづくり」のための 地域の見方・調べ方・考え方

國學院大學地域マネジメント研究センター 編
朝倉書店、2023年3月

「観光まちづくり」の学習における入門テキストとして、編集委員長の西村幸夫学部長をはじめ、さまざまな専門分野の本学部教員16名が執筆に携わりました。本書は「地域を見つめる」(調査)と「地域を動かす」(実践)の二部構成となっており、観光まちづくりの実践スキルや提案力を養う内容となっています。また、図表や写真を多用し、各教員が研究している具体的な事例を分かりやすく紹介している点が特徴です。観光まちづくりに興味をお持ちの方にとって、本書は必ず役立つ一冊です。



浅野 聡 (あさの さとし)
國學院大學 観光まちづくり学部 教授
東京都生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業。同大学院博士後期課程修了。早稲田大学助手、三重大学大学院工学研究科建築学専攻准教授、教授、同大学地域防災・減災センター副センター長を経て現職。専門は、都市計画、景観計画、防災・復興まちづくり。ジャパン・レジリエンス・アワード2015金賞、日本建築学会賞等を受賞。

地域内外のつながりが 観光まちづくりの特徴

●山：続いて清野先生は第1部の第4章と、第II部の第10章を執筆されました。

浅野：ご覧いただきとわかるように、つながりという言葉がどちらにも出てきます。第1部は「地域を見つめる」というテーマで、地域の理解と把握、第II部は、「地域を動かす」というテーマで、知った情報を踏まえて、地域を新しく変える、計画する、構想する、という明確な位置付けがあります。その中で、つながりという観点で、地域の把握の仕方と、動かし方という両方を担当しました。

第4章は高和雄先生と一緒に、「地域の社会構成とながりを知る」というテーマで書いています。

●山：具体的にはどのような内容でしょうか。

浅野：本学部の学生には、最低限必要な災害情報は理解してほしいと思います。東京、首都圏ではいつ地震が起きるかもわかりませんが、近年は地球温暖化により台風が巨大化する傾向があります。学生が最低限自分の身を守るために必要な、防災、災害情報の仕組みを理解しておく、必ず役に立つと思います。

●山：観光まちづくりに防災の視点が必要なのですね。

浅野：本学部の学生には、最低限必要な災害情報は理解してほしいと思います。東京、首都圏ではいつ地震が起きるかもわかりませんが、近年は地球温暖化により台風が巨大化する傾向があります。学生が最低限自分の身を守るために必要な、防災、災害情報の仕組みを理解しておく、必ず役に立つと思います。



堀木 美告 (ほりき みつぐ)
 國學院大学 観光まちづくり学部
 教授
 千葉県生まれ。東京大学農学部林学科卒業、同大学院農学生命科学研究科森林科学専攻修士課程修了。専門は造園学、観光計画、観光資源論。(公財)日本交通公社にて観光政策・計画を中心とする調査・研究業務に従事した後、淑徳大学経営学部観光経営学専攻教授を経て現職。



穂高連峰と梓川を望む優れた視点場として賑わう河童橋 (中部山岳国立公園・上高地)

山島…続きまして、私からはこの本のお勧めの読み方や活用法について伺いたいと思います。それでは「観光まちづくり演習I」をご担当された清野先生からお願いいたし

読者は 観光まちづくりに関わる 学生から専門家まで

山島…続きまして、私からはこの本のお勧めの読み方や活用法について伺いたいと思います。それでは「観光まちづくり演習I」をご担当された清野先生からお願いいたし

て、フェノロジーカレンダーを紹介しています。地域の自然や文化の移り変わりを1年を通してみることはなかなか大変です。研究者としてフィールドに入り込めばそういった活動もしますけれど、一つのフィールドを1年間追いかけることは、学生ではなかなか難しい。そこでさまざまな情報源を利用して、四季に応じた地域資源の移り変わりの様子を整理してみましよう、というものです。第1章の風景も第2章の暦も、自分の身の回りにある普段あまり意識しないものも地域資源だという点を、少し意識的に捉えてもらいたいと考えています。

山島…フェノロジーカレンダーの作成を通じて地域を多面的に知ることができそうですね。ありがとうございました。

くことが、観光まちづくりを考えるために役立つとの考えによるものです。

山島…たしかにまちづくりの取り組みの歴史や蓄積には、組織の機能が重要ですね。**清野**…また、第2部第10章は多様な主体とつながるという内容で、米田誠司先生と一緒に担当しました。つながりという言葉自体は、多分、東日本大震災以降でしょうか、すごくキャッチーな言葉で、私たちの心理的な状況からすると、響いた言葉なので、大事なものとして長く取り上げられ続けているのだと思います。

山島…そうですね。**清野**…そしてつながりの中身が大事です。私が担当したのは、そのつながりをどうつくっていくかということ。つながりをつくっていくためのプロセス、どんな時間軸で、さまざまなアクションをどのように仕掛けていくと、つながりが生まれるのかを紹介しています。例えば、まち歩きをしたら地域の人と仲良くなれてつながりができます。しかしそれだけではなくて、歩く人に地域のことも知ってもらえて、同じ興味とか関心を共有できるよね、みたいなことも書きました。

あとは、プログラム、場や空間、場づくりもすごく大事だと書いています。場を生かしたプログラムがあると、そこで共通の関心を持った人がつながれる。いろんな立場の人がつながること、一つの資源をどうしていくかとかアイデアが出てきたり、新しい動きが生まれたりするんじゃないか、そういう動きをどのように作ったらいいか、ということを書きました。

地域の風景と 暦を通じた 観光まちづくりの深化

山島…ありがとうございます。次に堀木先生が担当された箇所は、第1部第1章「地域の風景を知る」と、第2章「地域の暦を知る」ですね。こちらの概要や読みどころについて教えてください。



都市近郊の水田でも季節の移ろいや自然と人との関係性を見て取る (横浜市青葉区)

堀木…第1章「地域の風景を知る」では、下村彰男先生がまず「地域の資源と個性」について書かれています。編集会議の初期の段階で、このパートをどこに置くべきか

悩みました。**山島**…それはなぜでしょう。**堀木**…第2部に「地域資源を観光まちづくりにつなげ、魅力をつくる」という章があるので、先に地域の資源や個性にどこかで触れておく必要があります。第1章で地域の風景について執筆することになったので、冒頭で地域の資源と個性について触れることになりました。**山島**…なるほど、そういう経緯があったんですね。

堀木…はい、風景は重要な地域資源の一つですから。学生の皆さんはスマートフォンを持っていきますから、あまり意識することもしないで気軽に写真を撮りますよね。だからこそ、改めて地域の風景をしっかりと自分の目で見ると、ということを意識してほしいなという思いもありました。

山島…それはどういうことでしょうか。**堀木**…写真を撮る時には、撮影者の視点と撮影対象があり、両者の関係の中で一つの風景として記録することができる。一方で地域全体を俯瞰するようにして風景を捉えることも重要なですが、その根幹になるのも、やはり地域をよく見ることに他ならないということ。これをどう説明するかが難しく、悩みました。

山島…第2章にはどんな特徴がありますか。**堀木**…風景を含めて地域の現状についての調査は取り組みやすいのですが、現在に至るまでの変遷、時間軸を調べてまとめようとする、それなりのスキルが必要。それらを視覚的に表現する手法の一例として、

行き先を決めたらハザードマップを調べて沿岸部では津波浸水想定区域外のホテルを選ぶ、という使い方をしました。**山島**…とても身近で実用的に使えるんですね。**浅野**…学生を連れて知らない町に調査旅行に行く際にも、ハザードマップを必ず見るようにしています。特に沿岸部で真夜中に津波が発生した時にどう行動するかということを考えることも大事です。真っ暗で、どの方向の標高が高いかわからず、海の方に行ってしまうかもしれません。

調査時には必ず学生と避難所や避難場所を共有し、全員にマップを持たせて観光地の調査をするようにしています。**山島**…それはフィールドに出る際には必要なことですね。**浅野**…本学部の学生は、これからさまざまな観光地に調査に行く機会があるので、いつ、どこへ、誰と行くのか、その条件を自分の頭の中に入れておいてほしいです。小さな子供や高齢者と一緒であれば、より安全なところ、高台など立地の良いところを選んでください。

観光旅行や大学の授業で観光地に調査に行く時などに、気象情報を理解して、台風の接近が予測されたら勇気を持って旅行をキャンセルする、このようなことに生かしてもらいたいと思います。そのため入門編の基礎知識を記載しました。**堀木**…活用のしがいがある本であることは間違いないでしょう。例えば昨年の基礎ゼミナールでは鎌倉を訪れ、興味を引かれた風景を撮影してもらいました。参加した学

生の皆さんの関心事がストレートに伝わってきて興味深かったのですが、この本の内容を学んだ後であれば、地域の姿を捉える際の視野が広がりますから、また違った結果になっていただろうと思います。

山島…それはとても面白いですね。

堀木…今年の基礎ゼミナールではキャンパス近郊の里山のフィールドを訪れます。秋から冬にかけて現地を訪問することになりますが、地域の個性を読み取るためには目の前の風景から春や夏の様子にも思いをはせることが必要になる。ぜひ本書の内容も参考にしてほしいですね。

清野…風景はまちづくりでも大事なものです。地域住民にとっては当たり前ですが、その価値がなかなか気付きにくいんですよね。訪問者にとって価値がある風景だとか、人に来てもらえらるか、あまり考えないと思います。普段当たり前に受け止めているものを一度見つめ直すきっかけを提示し、隠れた資源を発掘するアクションを促す、そういう内容がこの本の特色だと思います。

堀木…地域資源の発掘では、住民の方々に季節ごとの魅力になりそうな「もの」や「こと」を挙げてもらう取り組みもありますね。ある地域で季節の移ろいに応じた自然環境の様子や、祭りや結びついた伝統的な食、古くからの伝説などあらゆる要素を、イラストを添えて書き出してもらったことがあります。そうしたところ、全て並べると365日の年間カレンダーになるほどの魅力が出てくるわけですね。

清野先生のおっしゃるとおり、地域外の

点でまとめたところに、この本の特色があるのかなと思いました。観光まちづくりのために1冊の本を組み上げるコンセプトや方向性についても少し伺えれば、と思います。

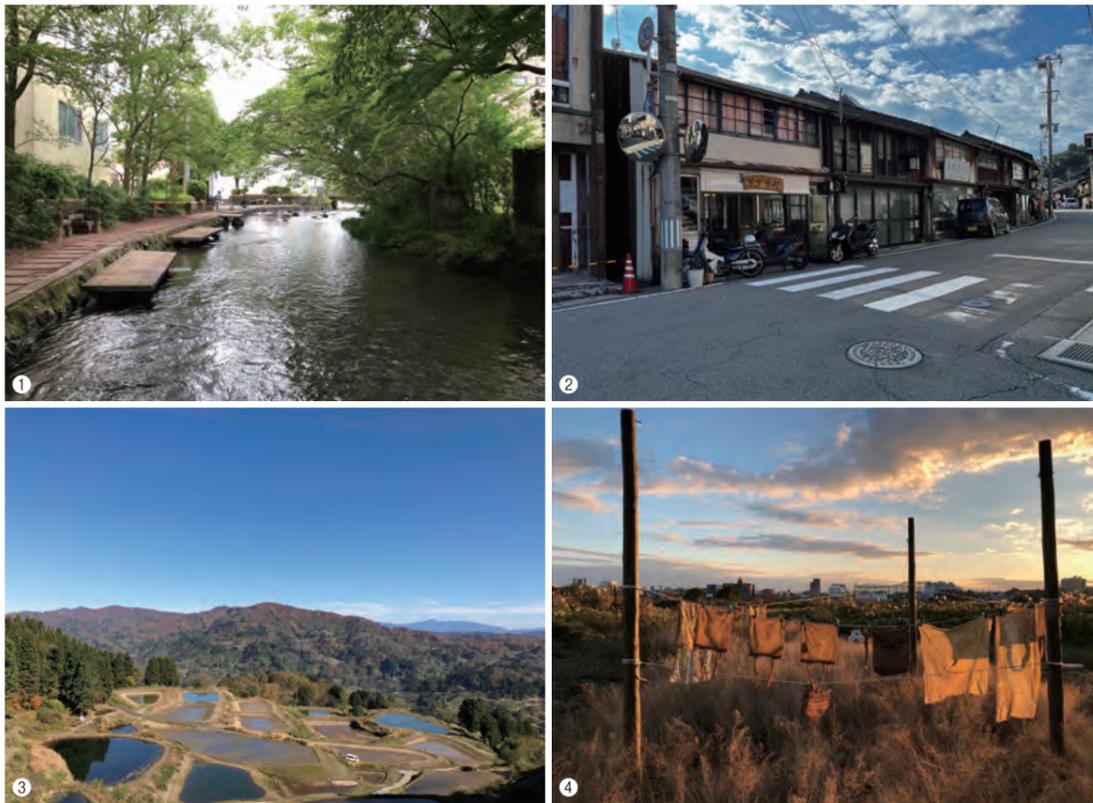
浅野…原稿を書く時に注意したことがあります。

第11章では危険情報を発信することに触れているため、ハザードマップを掲載するかどうかはとも気をつけました。関係する自治体や関係者、マップ内に住んでいる住民の方が読んでも理解してくれるように配慮することがとても大事です。洪水ハザードマップの事例では、地元事例が学生にも身近に感じられると考え、横浜市を取り上げました。横浜市中央区の洪水ハザードマップからは、壊滅的な被害が想定されないことがわかり、取り上げやすかったこともあります。

中川…そういった情報が及ばず周囲への配慮は大事ですね。

浅野…それから、本学部の学生には、南海トラフ地震に興味を持ってもらいたかったので取り上げました。私は以前三重大学に勤めていましたので、國學院大学と関わりの深い伊勢神宮のある伊勢市が良いだろうと考えました。伊勢神宮の立地は、先人たちがよく考えていて、標高の少し高いところに設けられているので、敷地内に津波は来ないとされています。

そのような事情にも配慮し、神社のある有名な観光地でも地元の観光関係者にはご迷惑はかからないだろうと考えました。災害情報は大事な情報ではありますが、現地



①まちなかを貫く清流(静岡県三島市)
②夕待の港の風情が残る町並み(新潟県佐渡市)
③雪解け水を活かした棚田(新潟県長岡市山古志地域)
④在来の草花で染色を楽しむWS(東京都世田谷区)



清野 隆 (せいの たかし)
國學院大学 観光まちづくり学部
准教授
山梨県生まれ。東京工業大学で社会学、コミュニティデザインを学ぶ。博士(工学)。2022年より現職。専門は歴史を生かしたまちづくり、都市農村交流、エコロジカル・デモクラシーの都市デザイン。共著に『はじめてのまちづくり学』(学芸出版社、2021)、『地域文脈デザイン』(鹿島出版会、2022)。

人に言われて初めて足元の魅力に気が付くということが多くですが、やってみたら結果的に365ものアイテムが集まった。学生が地域の方々と交流すると、いろいろな面白いことがおこるかもしれません。

清野…地域の人も自ら積極的には語って

の方に配慮しながら、かつ読者にとって勉強になるように取り上げることには、いつも気を付けています。

堀木…第1部は、「地域を見つめ、動かす」という取り組みのうち、「見つめる」ための手法を広くカバーする内容です。観光まちづくりは非常に広範にわたる取り組みなので、まずは一つでも二つでも、自分の関心のあるところから身に付けてみよう、という読み方もあると思います。

また、本全体をパラパラと眺めると、執筆を担当した教員の専門分野に触れることにもなるでしょう。観光まちづくりの学びの視野を広げていく、自分が関心を持っていることだけではなくて、新たに少し自分の視野を広げていく、自分の進路を考えることにもつながっていくのではないかと期待しています。

清野…本書に掲載した図や場所は、観光のためじゃなくて、地元の人たちがまちづくりにために行つたものだから、観光が目的になったり、ニュアンスが変に伝わったりするのは嫌だ、そういった指摘もありました。読者は執筆者の意図から離れて理解することもあり、魅力的だなと思えば観光の対象にしてしまうかもしれません。そういう点には執筆の際に気を付ける必要があると思います。

中川…たしかにそうですね。

清野…その際には、観光目的として書いているわけではなく、地域の人が行っている自分たちの大切に行っている場所を守るための活動を紹介しています、と丁寧に説明することにしました。

れないので工夫も必要ですよ。

堀木…そうですね、学ば側、指導する側での事前準備が大切ですね。そのためにはこの本をうまく活用できると良いだろうと思います。

清野…風景も層も、一つ一つの要素が実は

堀木…第2章ではフェノロジーカレンダーのイメージを掲載しています。実際に地域で作成された事例を取り上げる予定でしたが、具体例に引張られてしまう懸念と、どの事例を選択するか判断が難しかったことからイメージにとどめました。全国各地で作成された素晴らしいフェノロジーカレンダーがありますから、併せて参照してもらえたらと思います。

浅野…どの事例を取り上げるかは本当に難しいですし、地域への配慮も必要ですね。

清野…地域にエールを送るつもりで掲載する、ということも大事かもしれません。その意味で、自分が関わっている地域を自分が責任を持ちながら執筆する姿勢が大事かと。

浅野…それは重要ですね。自分と信頼関係のある地域の事例を掲載することが一番良いでしょう。今後、本学部の1学年3000人の学生が、さまざまな地域にヒアリングに行つた時に、地域に迷惑をかけないようにマナーを守ることが大事ですね。

フィールドワークの技法は

今後の執筆テーマ

清野…今回はフィールドワークのマナーなどについては書けませんでしたけど、今後検討する必要がありますね。フィールドワークに出ないとわからない情報はあるので、調査の技法や心構え、地域との関係づくりなどは伝えるべきかなと思います。

執筆の想いは 地域へのエール

山島…本場にそうですね。

中川…観光まちづくりという言葉は、今はそれほどなじみのない言葉である、ということも書かれています。観光まちづくり学部の教員は、都市計画や、社会学、造園部、観光という、さまざまな専門を持っている、その分野ごとに教科書や書籍があると思いますが、それらを観光まちづくりという視点

本書の全体構成は、地域の見方・調べ方に、まちづくりと観光という視点が入っていることが特徴です。例えば第5章は、都市の人の動きについて書いていますが、これは観光と切り離してみても重要な要素視点だと思えますし、第6章は、観光の経済的な数字面での捉え方や、観光まちづくりを構想するために必要な情報について書かれています。

また、第12章は情報発信や情報戦略がテーマですが、情報発信の前に地域を理解把握することが大事であり、地域の本質をどう伝えられるか、ということがとても丁寧に書いてあります。こういった点が観光まちづくりの視点ならではの内容です。

中川…観光まちづくり学部ならではの本の要素についてお話が伺えたかなと思います。ありがとうございます。本日はどうもありがとうございました。



聞き手：國學院大学 観光まちづくり学部 助手(右から) 圓山 王国(まるやま おうこく) 専門：都市計画学、多文化共生 山島 有喜(やましま ゆうき) 専門：風景計画学、都市緑地 中川 雄大(なかがわ ゆうだい) 専門：社会学、都市研究

研究クローズアップ

分野を横断するテーマである観光まちづくり。
松本貴文准教授に地域社会の観点から語っていただいた。

(本記事は、國學院大學広報課が2022年12月7日に行ったインタビュー記事に松本貴文准教授が加筆し、再構成したものです)



松本 貴文 (まつもと たかふみ)

1981年、熊本県生まれ。熊本大学大学院社会文化科学研究科修了。博士(学術)。専門は農村社会学、地域社会学。尚絅大学文化言語学部助教、下関市立大学経済学部准教授を経て現職。専門は農村社会学、地域社会学。

変化する農村を 調査するようになら なるとまで

生活者の目線で、地域社会を研究する。文字にすると簡単なようだが、単に外部から切り取ったりのぞき見たりするのはなく、地域づくりにボジティブな影響を与えていけるような研究の在り方は、常に試行錯誤のなかにある。松本貴文・観光まちづくり学部准教授もまた、そうしたトライを重ねるひとり。地域社会研究に目覚めたきっかけを交えながら、「生活者のリアルティ」について語っていただいた。

現場に足を運んでこそ見えること

できるだけ、そこで暮らしている人たちの現実感覚に沿った研究をしたい。そう願いながら、社会学の視点から農村の地域社会を研究している。

ネットワーク型組織の存在

福岡県柳川市における「掘割」の保全を研究していますので、それに関する例を挙げてみましょう。柳川市内は元来、真水を確保するのが大変困難な地域で、水を効率よくいきわたらせ利用する仕組みとして掘割が整備されてきました。掘割はその他にも災害を防

止める役割ももちろんだ重要なのですが、時に生活者の目線とずれてしまうこともあります。私は農村における伝統だけでなく、変化にも着目しているのですが、そうした変化にもまた、現場に足を運ばないと見えてこないところがあります。農村の地域社会における変化というものは、統計に表れるような高齢化や人口減少だけでなく、町内会・自治会など住民自治組織の役員の変更方から、その会費の徴収の仕方、活動の内容、さらには家族や近隣との関係など、多岐にわたります。

いざり地下水を涵養したりするなど、さまざまな機能を果たしています。しかし、高度経済成長後、その掘割が汚染・荒廃してしまいました。現在は、市民と行政の共同による再生を経て、その保全活動が継続されています。

興味深いのは、「矢部川をつなぐ会」などの、柳川市外にまで広がる、多様な主体が参加するネットワーク型組織の存在です。こうした組織を通して、掘割と矢部川流域や筑後地方一円といった周辺の地域への関心と結びついていくだけでなく、ネットワークを通して市外の人たちや団体が、地域社会の単位で行っている掘割の保全活動に参加するという場合も見られます。

こうした例は、至る所で枚挙にいとまがないと思います。集落のお祭りなどの地域活動に、集落を離れて暮らしているけれども、担い手として手伝いに来る若い世代の人々がいる、という話は珍しくありません。集落外から通っているという農業後継者の方からお話を聞いたこともあります。ただ、国や地方自治体が行う統計調査だけでは、こうした細かな移動や人間関係を捉え



柳川市・北原白秋最後の思郷の詩
【帰去来】の詩碑

ることは難しいため、このような地域の変化をすくいとらばいい、という面があります。そこで、私たちは現場に足を運んで、こうした具体的な生活のなかでの変化を、地域の人たちからお話を聞きながら考えていこうとしています。

地元出身地での縁が 研究のきっかけ

なぜこうした視点からの研究を行うようになったかといいますと、まず私の出身地に関係があります。生まれた

のは熊本県南部、球磨川流域の農村でした。小学校に入る前に熊本市内に引っ越したのですが、夏休みなどに長期で帰省していたこともあり、生まれた土地はずっと自分の原風景となっていて心に残っていました。祖母の手伝いで茶摘みや田植え、稲刈りなどしていました。

ただ、大学に入ってすぐに農村や地域社会のことを研究しようと思ったわけではありませんでした。そのころは、特に明確な意識を持つでもなく、しばらくは思想・哲学などに興味を持っていました。次第に現代社会のことについて考えてみたいと思うようになり、社会学を専攻することになりました。

そこで社会調査の実習授業を履修することになり、天草の農村・漁村調査に参加しました。数日間、同級生たちと一緒に現地泊りして家々を訪問しながらアンケート調査をしました。これが、本当に面白かったんです。時には、海で釣りなどもしながら……(笑)。社会調査の楽しさというのを知りました。

その後、卒業論文を執筆するため、熊本県球磨郡にあった須恵村「平成の大合併」によって2003年、あさぎり町となった一を調査することにしました。ジョン・エンブリーとその妻のエラが、1935年から翌年にかけて調査を行ったことで知られる村です。またま授業で、エンブリーの著書『須

恵村』が、外国人研究者による戦前の日本農村研究として名高いものだということがわかったのですが、須恵村は私の生まれ故郷からそれほど近く、名前を知っている地域でしたから、とても親近感がわき、調査してみたいと思いました。そこで、須恵村がエンブリー夫妻の調査後どう変わったのかを、卒論のテーマに決めました。

それでひとりで、あさぎり町の役場を訪ねました。「卒業論文を書くために調査をしたいんですが……」と切り出すと、応対してくださった職員の方に、「それで、どこに泊まるの?」と聞かれました。学生でお金もあまりなかったもので、「現地でキャンプでもしながら調査しようと思っています」と答えると、なんと「寒いから、うちに泊まればいいよ」とその職員さんがおっしゃってくださったんですね。

それで本当に、職員さんのお宅にご厄介になることになりました。その方のご両親が案内をしてくださり、村のほうぼうに連れて行っていただいたり、知り合いにつなげていただいたりしました。その職員の方は既に退職されているのですが、それでもご縁は続いています。こうした関係性が築かれていくということもまた、農村や地域社会について研究する面白さに目覚めていくひとつのきっかけとなりました。

しっかり現場を見て考える

学部・大学院で指導をしてくださっ



須恵村文化財案内図



書籍「新・全訳 須恵村-日本の村-」
(農山漁村文化協会 2021年)

た先生は、学問としての社会学を学ぶだけではなく、しっかり現場を見て考えるようにと教えてくださいました。それで、様々な地域に実際に足を運びながら、調査の経験を積んでいきました。その過程で現実の社会を分析する、そこから地域づくりにつながっていく、そんな意義のある研究ができたらと考えるようになり、現在に至ります。



生活者の目線を意識した 地域社会研究



「危機」とは異なるリアリティ

私が研究者の道を歩みだして以降、2000年代から2010年代にかけては、地方や農村の高齢化や人口減少による消滅危機が強調されるようになってきた時期でもありました。もちろん、過疎は重大な問題ですが、私自身は、必ずしも「危機」だけが農村のリアリティではない、と感じています。

例えば、現地での調査やワークショップ

の場面で「何か困っていることはありますか」と尋ねます。すると、「若い者がおらず高齢化が進んでいる」、「人口減少で困っている」といったような話はたくさん出てくるんです。しかし、もう少し具体的な日常生活のこと、例えば、「買い物がない」とか「病気になるたとき通院ができない」といったことがあるかを聞いてみると、意外とそうした具体的な困りごとはありませんという答えが返ってくることも多いのです。

もちろん、地域ごとの深刻さには大きな違いがあるでしょうが、少なくとも、外側から統計などの数字だけを見て想

多様な農村景観



「中山間地域の農山村」岐阜県高山市



「半島の農村・漁村」山口県長門市



「盆地の平地農村」広島県東広島市

像するような「危機」とは異なるリアリティが存在していることも、またたしかなんですね。私が調査員や共同研究者として参加した農村調査の結果や、他の研究者による同種の農村調査の報告を見ても、「生きがい」や「地域の住み心地」について尋ねた項目において、ポジティブな回答の比率が高い傾向にあります。「限界集落」といった捉え方に、全くリアリティがないわけではない。かといって、生活全体を見てみれば、生きがいのある暮らしができて住み心地のよい地域という側面もある。ここには矛盾があるようですが、その背景にはさまざまな人間関係を通じた支援の存在があると考えています。例えば、地域で農道の草刈りをしなければならぬとき、高齢化が進めば負担はどんどん大きくなる、しかし、近くに住んでいる子どもがちょっと帰省して手伝ってくれる、というようなこともある。モビリティが高まり、スマートフォンなどの情報通信技術が発達した現代では、そうしたつながりを維持していくことも容易になっていると思います。

農村社会が持つ サステイナブルな価値とは

一口に農村といっても実際は非常に多様であり、地域環境や農村景観もさまざまです。こうした地域環境の管理にも、都市の側からは見えにくい部分があります。里山はかつて農村の暮らしにとって必要な資源の宝庫でした。ところ

が、その管理を続けていくことが難しいという地域も増加しています。高齢化や人口減少だけでなく、利用するメリットが失われてきているからです。しかし、それでもなんとか管理を続けたいという方々もおられます。お金にならないなら管理を続けるのは合理的でないとと思われるかもしれませんが、管理する作業を一緒に行うことで地域社会のつながりを維持することができ、というようなことも考えなくてはなりません。そうした地域社会のつながりが、先ほどふれたような農村の人々の生きがいや住み心地に関係している可能性もあるからです。

農村における地域環境の管理ということについては、このように一見経済的な合理性があるとは思えないような営みが、地域社会にとってはとても大切な意味を持つ場合もありますし、さらには、広く社会全体のサステイナブル（持続可能）な在り方とも関わっている、ということも考える必要があると思います。例えば、農村に住んでいる方たちが「SDGsの達成に向けてこれこれを実践している」ということはあまりおっしゃらないでしょうが、しかし、普段の生活のなかで続けておられることが、サステイナビリティの実現に貢献している、というケースもあることでしょう。

再生可能エネルギーと 地域づくり

地域環境という観点で私が近年関心を抱いているテーマのひとつは、再生可

能エネルギーと地域づくり、というものです。私自身は決して環境問題や再生可能エネルギーの専門家ではないのですが、地方の方々がどんな動きを見せているのか実際に現地を聞いていくなかで、特に東日本大震災以降に目にするのが多くなってきたのが、再生可能エネルギーを活用した地域づくりの取り組みです。

例えば私が調査した熊本県のある農村集落では、集落の共有地の管理を続けていくために太陽光発電所を誘致し、その収益をもとに耕作放棄地の管理を再開するなどの地域づくりに取り組んでおられました。ただ、この事業は発電所を運営する企業との連携で実現したものでしたので、企業と地域社会とは性格や目的が全く異なるため、その調整にさまざまな課題があるようにも感じました。それでも、地域環境の新しい活用方法を見つけ、さらに、それを集落の住民同士や外との関係づくりにつなげて、持続可能な地域をつくるという方向性は、とても魅力的だと感じました。

他にも、これは海外の事例になりますが、ドイツ・バイエルン州にあるグロースパールドルフという村の取り組みは興味深いものでした。エネルギー転換の先進国であるドイツ南部の人口1000人にも満たない小さな村ですが、遊休農地の他、村のサッカースタジアムや倉庫の屋根を利用した太陽光発電、バイオガスを発電とその廃熱を活用した地域熱供給、風力発電など、地域環境を活用した



ドイツ・グロースパールドルフ村の音楽隊旗



ドイツ・グロースパールドルフ村のバイオエナジーアリーナサッカースタジアム

さまざまな再生可能エネルギー事業に取り組んでいます。

しかもそうした事業が、村の経済的な収益となるだけでなく、地域社会における活動の活性化に大きく関わっている。その結果、すべての住民が再生可能事業に投資しているわけではないのです

が、しかし再生可能事業への関心は広く住民に共有されているんですね。これはどういうことかといえますと、サッカーや音楽などをはじめとして、グロースパールドルフ村には数々のクラブがあり、住民が地域社会に参加する窓口になっているんです。再生可能事業からの収益によってそうしたクラブを支援することで、住民の生活や地域社会の充実に貢献していく、という構図になっているわけです。投資している人だけが見返りを得るのではなく、皆が「われわれの事業」として自然に受け止めるようになってくることで、事業そのものも受容される。こうした仕組みは、日本でも広く参考にできるものではないかと感じています。

地域のことを 住民の方と一緒に考える

これからの私の研究ということでは、九州出身ということもあり、これまで西日本中心の調査を行ってきたのですが、今後は東日本の農村の暮らしについて理解を深めていければと思っています。そのときにも大事にしたいのは、専門家・研究者としての視点だけでなく、地域のことを住民の方々と一緒に考えるという姿勢を持つことです。地域の方々にとっての、対話の相手になる。そうしたイメージで、今後も調査・研究に取り組んでいきたいと考えています。

丸ごと博物館24年間の挑戦

昭和のくらし博物館 学芸員 小林こずえ

昭和の家と家財道具を残す

昭和のくらし博物館は、東京・大田区に昭和26年に建った木造2階建ての庶民住宅を保存し、中の家財道具と共に公開している「丸ごと博物館」である。家具・道具・室内意匠史と生活史の研究者である小泉和子が、長年の研究から、一番身近な暮らしが軽んじられてきた歴史を痛感し、実家だった建物を修復し、「家を残し暮らしを伝え 思想を育てる」という目的で自ら館長となり1999年に開館させた。常勤職員1名、非常勤3名、年間来館者は4〜5千人の小さな手作り博物館である。

明治生まれの両親と昭和8年から22年の間に生まれた4姉妹の6人家族がくらし、昭和20年代後半から30年代前半の郊外都市生活の再現が展示の中心である。ちゃぶ台、茶箆筒、足踏みミシンのあるお茶の間、氷冷蔵庫、七輪、鏝削りが並ぶ台所、書斎、子供部屋などを巡り、高度経済成長期夜のくらしの情景を感じられるようになっていく。旧小泉家住宅は、戦後の住宅復興政策である住宅



住人がいるかのように再現しているお茶の間

金融公庫の融資を受けた最初の公庫住宅である。65坪の敷地に18坪の小住宅だ。設計者は一家の主で東京都の建築技師だった小泉孝。資材やスペースを節約し、実験住宅のように工夫を凝らしている。登録の要件である建築後50年を経た直後の平成14年に国の登録

有形文化財となった。

所蔵資料は、小泉家の旧蔵品と全国から寄贈された昭和40年代頃までの生活道具である。鏝削りした鍋や織物の当たった風呂敷など、普通なら真っ先に処分されてしまうものがここでは生活の細部が分かる貴重な資料となる。展示・研究で使う他、体験学習やワークショップにも積極的に使っている。ほとんどが露出展示であるため傷みが進むものもあるが、「今あるものを今の人に伝える」ことを主眼としている。

展示では、四季に応じてしつらい替えをする常設展の他に、勉強会方式で生活史を掘り起こす企画展、美術工芸関連の特別展を開催。建築・家具関連の歴史講座などを開催する他、障子張りやお釜でのご飯炊き、繕いもの、洗い張りといった、家電普及以前はどの家でも行っていた衣食住に関する家事仕事を体験し、昭和の知恵や工夫を学ぶ「くらしの学校」というワークショップを行っている。



電と釜を使ったご飯炊きなど昔の知恵を学ぶ講座

家に残る戦争「展」では、堂々と反戦平和を訴える展示ができる。特別展では、実業家・渋沢栄一最後の孫である鮫島純子さんの本の原画展や、漫画家・高野文子さんの原画展、アニメ映画「この世界の片隅に」の原画&

手作り博物館のスタート

一番の特徴は、私設での運営ということである。館長は、国や地方自治体、企業の文化財の保存活用事業に携わってきたといえる一研究者には一軒丸ごとの保存の負担は大きく、当初は自治体に寄贈を打診した。しかし受け入れが叶わず、ならば個人でできるところまでやろうと、試行錯誤しながら始まった。展示自体も真正正銘手作りで、廃材を転用してパネルや展示台を作ること多い。お金をかけずに頭を使うという方針だ。運営費や広報面での公的支援がないことの苦労は大きい。援助がない分制約もない。活動の自由度が高いのが最大の利点である。良い出会いを展覧会や講座にすぐにつなげられる。第一線で活躍する研究者を招いて講座を開催する一方で、市井に眠る稀有な技術や経験を持つ方々を発掘して交流する「お茶の間サロン」も行ってきた。毎年8月の夏の特別展「小泉



小学生の体験学習にもボランティアさんが活躍

再現展などを開催し、多くの来館者やつながりを得ることができた。

開館のモットーとして掲げた「家を残し暮らしを伝え 思想を育てる」という言葉には、建物や資料をただ保存するのではなく、研究を研究のままにせず、今後の自分たちのくらしを見つめ直す指針にしてほしいという強い願いが込められている。資料が並ぶだけの「死んだ博物館」にはしたくないという思いもある。また同時に、ここをコミュニケーションの場所にしてほしいということも願っている。会員アンケートを行った際、館内で一番人気の場所は、お茶の間を歩いて縁側であった。柿の木の枝を渡る風を感じながら縁側に座ってのんびりするというのは、現代の都市空間では贅沢なことなのかもしれない。

場を開いて生まれたこと

博物館の趣旨に賛同して、多くの方が集まってくださるようになった。場を開いたことにより、開館前に予想していた以上の活動が次々に生まれたのだ。

がいが、初期の頃は友の会の運営メンバーが八面六臂の活躍だった。会員をつなぐおたよりの発行、見学会や七輪体験会などの企画、近隣を取材・調査しての近所マップ作り、ボランティアの呼びかけなどなど。中でも圧巻だったのは夏のおまつりで、演劇経験者が脚本を書き、会員から劇団員を募って芝居の稽古をし、閉館後一夜限りの野外幻燈会という朗読劇を開催した。たくさんの枝豆やトウモロコシをゆで、スイカをたらいに冷やしておく。小さな庭に、老若男女160名の会員が集まった年もあった。冬には、畳上げや障子張りなどの大掃除を行い、最後に刺がした障子紙を燃やしてお釜で炊いたご飯を皆でいただく。家を残したことにより、さながら昭和の人のつながりまでもが戻ってきたようであった。



庭が劇場となる友の会のまつりでの野外幻燈会

日常のガイド、受付、掃除、庭の手入れなどでは、ボランティアの皆さんの力に頼る場面が多い。着付けや修理などの技術を借りることもある。このたびのコロナ禍により令和2年3月から断続的に臨時休館を余儀なくされたが、休館中でもすぐ庭は荒れ、資料に埃は積もる。誰にも観てもらえないのに手入れだけは続けるという悲しい状況だったが、あ

りがたいことに近隣のボランティアの方々が密を避ける形で集まった。掃除をし、外でお弁当を食べて帰っていく。収入減に喘ぐ博物館運営の支援バザーも企画してくれた。時にはお悩み相談や家族のグチ大会、情報交換が世帯を超えて始まる。それが楽しくて、この時期に定着したボランティアさんもいた。

このような活動がスタートできたのは、近隣の先駆者の存在も大きい。静かな住宅地の真ん中に突如オープンしたために、当初はなかなかつながりがつかめなかった。商店街の反応も芳しくなく、役所では「民間だから」と言われてしまう。そんな中、強力な支援者となったのが、野っ原を「くさっぱら公園」として住民運動によって立ち上げた方々だった。多くの協力者を紹介してくれたおかげで、活動のための人脈が広がった。

徐々に活動の蓄積が認められ、公的な支援者も増えた。区の担当部署の他、観光協会、文化振興協会といった外郭団体とイベントを協働するようになった。また「まちごと体験ミュージアム」という企画で区の助成金に応募し、商店街や近代建築を巡るツアーを企画した。全国の自治体の博物館の方や、建物の保存活用に奮闘している方々が視察に来られるようにもなった。「これだけ小さな文化財でもこれだけ色々なことができる」ということを全国に発信したい」という創立時の館長の思いは伝わったのかもしれない。

これからの役割

活動を長く続けるためにNPO法人を立ち上げ、平成30年から運営を行っている。人手と資金不足には変わりなく課題も山積みなのだが、夢だけはまだまだある。着実に増えてきた海外からの来訪者には、ごく普通の民家に入り込むかのような体験が喜ばれている。羽田空港に近いという地の利を生かしたいところである。また、近年はSDGsを学ぶ中高生だけでなく、博物館学や看護学、介護学の学生など、来館者の幅が広がっている一方で、昭和の記憶と技術を持つ世代は減り続けるという現実がある。次の世代に伝えるために今残すべきことが多いことを実感している。島根県大田市や愛媛県西予市など連携している地域もあるが、全国の志を同じくする施設とも交流を深めたいと考えている。近隣では、最寄の東急池上線沿線にある池上という町が近年盛り上がりを見せている。元々寺町だったところに民家を活用したカフェやシェア型書店などができ、地域に開かれた場が増えることで、より魅力的な人や場所が集まる町に変化している。ゆるく連携して回遊できる地域を広げてゆければと願うところである。

前述の公園の発起人の一人は、元々この地の出身でなかったが故に「血縁だけによらない自分の田舎（ふるさと）を自分で作った」と語っていた。博物館も開館して年月が経ち、初期の学芸員実習生やボランティア、会員さんが、人生の節目に立ち寄りたり、新しい家族を連れて遊びに来られるという嬉しい場面も増えてきた。来年は開館25周年を迎える。展示・研究する博物館でありながら、町の中で立ち寄り、息を抜き、多世代で交流するという、「実家」や「ふるさと」の役割も果たせればと思っている。

昭和のくらし博物館



東京都大田区南久が原 2-26-19



詳しくはこちら

地域と歩む博物館

佐田岬半島に位置する、出来立てほやほやの博物館

佐田岬半島ミュージアム 高嶋 賢二

背景

本年2023（令和5）年8月、愛媛県伊方町に佐田岬半島ミュージアムが開館した。その館名のとおり、四国の西端の日本一細長いといわれる佐田岬半島に位置する、出来たてほやほやの博物館である。

人口9,000人に満たない小さな町のミュージアム開館を後押しした要因の一つは、同年3月末日で閉館した前身の博物館「町見郷土館」と、その市民サポーター「佐田岬みつけ隊（以下、みつけ隊）」の活動にほかならない。本稿では、町見郷土館がみつけ隊と取り組んできた活動を紹介し、新しいミュージアムに引き継がれる地域との関わりについて触れてみたい。

町見郷土館

町見郷土館は、1997年3月に閉校となった旧伊方町立町見中学校の校舎を再利用し、99年6月に開館した。78年ごろから収集してきた膨大な民俗文化財の保管場所兼展示場が欲しいという町の文化財保護審議会の長年の要望が、地域の学校再編の中で生じた空き校舎の再利用で実現した形だ。しかも単なる資料置き場とせず、その設置条件に学芸員1名配属をうたったことが、この地域にとっては画期的なことだった。ただし24年後の本年閉館するまで常駐の正規職員は結局学芸員1名のみ。館長は当初公民館長等が兼



町見郷土館

で参加者にみつけ隊の趣旨を説明して、賛同を得たわずか数名でスタートした。その後みなさんで何か地域の調べものやってみましようとお話し合いをおこない、昔のおやつ調べや、当時県内各地で取り組まれていたクツワムシ探しなどを開始した。

隊員になるには、諸連絡先を伝え、毎年数百円の保険代を支払うのみ。それで1年間無料館に自由に入出入りできる隊員証と、隊員限定のニュースレター『みつけ隊通信』が送られた。この『みつけ隊通信』はA4表裏だけのミニコミ誌のような小さな通信だが、こんな活動をして次はここに行きますとか、やってみて分かったこと、行ってみてどうだったなど写真やイラストも交えて情報を詰め込んでおり、本年9月現在165号まで刊行されている。中には、地元出身だが町外に住んでいるため参加は難しいものの、この通信を目当てに入隊したという隊員も少なくない。

みつけ隊の大活躍

毎月何かしらの行事がおこなわれた。本格的な調査を進めたのは、神社などにある絵馬・天井画の悉皆調査で、とくに天井画は天井を見上げて首が痛くなる作業に耐えながら数年がかりで1冊の調査報告書刊行にまでこぎつけた。自然に詳しい隊員のサポートで進めたセミの抜け殻調査やタンポ調査では、町内の自然の基礎データを整える機会となった。

特定テーマで有志が集い活動する「部活動」と称する小グループも発足した。「古筆箭の会」はタンスに眠る古布を生かし昔のくらしを再現した人形を作るなど往時の服飾文化の顕彰に努め、某事業所製作の町内向けのカレンダーに採用された。石造物調査に特化した「ゴロリンズ」は、町内の五輪塔や宝篋印塔など1400点超を悉皆的に調べ上げ、2冊の報告書にまとめたほか、その石材が関西や九州など西日本各地に点在していたことから、各地の研究者を招いてシンポジウムが開催され、後に岩田書院から『石造物が語る中世の佐田岬半島』というブックレットとして刊行された。「はちくま隊」は自然班で、毎月第4水曜日の夜に「佐田岬半島の自然スライド上映会」を開催し、通算第180回を数えて新ミュージアムにも引き継がれている。

石造物シンポジウム

ほか、町内に

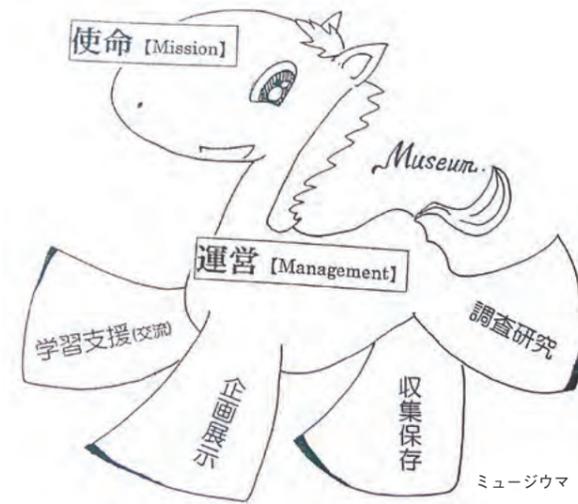
ある天然記念物の毎月「三崎のアコウ」の清掃活動や、例年2、3月頃に、地元で使用され寄贈された雛人形の飾り付け・片付けなどは、隊員の提案で始まって今日まで続く恒例行事だ。町

務し（のちに筆者が兼務）、途中からパートの事務補助員が1名増員という状況で（昨年度から地域おこし協力隊の学芸員1名も加わった）、事務の一部を教育委員会で補助したとはいえ、厳しい状況であった。

なお町見という名称は、九町浦と二見浦の合併で発足した村名に由来する。地元の人にもなじみ深いため館名にも引き継がれた。奇しくも「町を見る」と冠した館名は、後述する市民との二人三脚で取り組んだ活動と相まって多くの人に親しまれた。

佐田岬みつけ隊の誕生

サポーターとなるみつけ隊が発足したのは、平成の大合併で現伊方町が発足した2005年。博物館Ⅱ「展覧会を見に行く場所」ではなく、その①展示企画の背後にある②調査研究や資料の③収集保存、展示に絡めた見学会や講演会などの④学習支援・交流事業など、いわば博物館の4つの機能を、可能な限り市



ミュージアム

民参加でやってみようというコンセプトでスタートした。こうした着想には、02年に伊方町に来る以前、筆者が香川県の某博物館準備室でアルバイトとして、後には臨時職員等として関わった数年間の経験が大きい。

新ミュージアムの開館に向けた準備で、職員の方々と共にさまざまな現場での調査や資料整理に取り組み、地域の素性や新たな歴史を探索し、いつか地元の人々に還元されるであろう成果が蓄積されていく充実感、展示以前の話であるが、博物館の重要な魅力の一つだと感じたのだ。もちろん実際には、被調査者や資料寄贈者のプライバシー等の問題もあって、全てオープンに市民参加とはいえないが、それでも何ができるのかを模索していった。

課題はあるが

もちろん課題もない訳ではない。人間関係の微妙なバランスや難しさは常に付きまとうし、高齢化による免許返納や家族の介護で参加が難しくなった隊員も増えた。また近年は新ミュージアム開設の準備も抱え筆者の動きも鈍くなり活動を低迷させてしまった。しかし、さまざまな模索や葛藤を経て、隊長1名、副隊長2名を筆頭にいろんな場面で本当はいろいろお名前を挙げたいくらい絶妙なフォロワーで助けてくれる何人ものキーパーソンもいて、現在若者男女約80名を抱える巨大組織となつて館の活動を支えてくださっている。職員極少の零細博物館ではあるが、常設展示と企画展示（近年は休止中）を開催する傍ら、資料目録3冊・調査報告書6冊・研究紀要7冊や館報等も刊行しながら、なんとか博物館たろうと活動できたのは、まさにみつけ隊の存在抜きには語れないのである。

関連不明だが参考までに、町のアンケートで「佐田岬半島全体の伝統や文化に誇りや愛着を感じている」に回答した町民の割合（「感じる」と「まあまあ感じる」の合計）は、2015年に58.5%だったが、20年には88.1%に上昇している。

郷土館から新ミュージアムへ

3月31日ー最後の閉館日。夕方からの閉館セレモニーでは、みかんジュースの振る舞いやギターのミニ



閉館セレモニー

ライブを開いてくださる有志の加勢もあって動員なしで数十人が集う中、みつけ隊の隊長・副隊長がそろって登壇し、館から感謝状が贈られた。

新しい佐田岬半島ミュージアムは、こうした地域の市民パワーを引き継いで開館したもので、施設規模も職員数もちょっとずつ増え、館内にはみつけ隊を念頭にした念願の「町民活動室」も設けられて今夏ようやく船出した。これからは市民と共に博物館を通じて地域を深く見つめる航海を楽しんでいきたい。

博物館情報

佐田岬半島ミュージアム



愛媛県西宇和郡伊方町塩成乙293



詳しくはこちら



みつけ隊通信



絵馬・天井画調査



石造物シンポジウム

入試日程

◆令和6年度(2024年度)一般選抜入試

入試制度	試験日	出願期間	合格発表日
V方式(大学入学共通テスト利用入試)	1/13(土) 1/14(日)	1/4(木)~1/12(金)	2/13(火)
A日程 (全学部統一)	3教科型 (3科目の偏差値合計で判定)	2/2(金)	
	得意科目重視型 (最高成績科目の偏差値を2倍換算)	2/3(土)	
B日程(後期)	2/4(日)	1/4(木)~1/22(月)	
		1/4(木)~2/22(木)	3/11(月)

◆観光まちづくり学部特別選考入試 (V方式・A日程受験者対象)

入試制度	試験日	出願期間 (消印有効)	合格発表日	入学手続期間 (消印有効)
観光まちづくり学部特別選考	書類選考のみ	1/4(木)~2/22(木)	3/11(月)	3/11(月)~3/18(月)

入試のポイント

1 B日程で英語検定試験の利用が可能

試験科目「外国語」の代わりに英語検定試験のスコアが利用可能。スコアに応じて本学外国語試験の得点に換算します。スコアを提出したうえで本学外国語試験を受験した場合は、高い方の得点を合否判定に利用します。

2 観光まちづくり学部特別選考を実施

令和6年度V方式・A日程において、観光まちづくり学部観光まちづくり学科を受験した者を対象に、以下3点の総合評価によって合否判定を行う入試です。一般選抜入試成績だけでなく、学びへの興味・関心や学修意欲も評価します。

【選考方法】①志望理由書(700~800字) ②V方式・A日程の成績 ③調査書

入試検定料

応援割(入学検定料割引)を活用して、おトクにチャンスを広げよう!

複数の制度を同時出願した場合、入学検定料が割引になります。下記のケースを参考にしてください。

CASE.1 「共通テスト利用」を中心に受験を検討したい

V方式 + V方式 + V方式 = 合計 54,000円 → 38,000円 **16,000円の割引!**

CASE.2 「共通テスト利用」に加え、A・B日程でも受験を検討したい

V方式 + A日程(2/2・3・4のうち1日) = 合計 53,000円 → 43,000円 **10,000円の割引!**

CASE.3 A・B日程を中心に「共通テスト利用」での受験も検討したい

V方式 + A日程(3教科型(2/2)) + A日程(得意科目重視型(2/3)) = 合計 423,000円 → 83,000円 **40,000円の割引!**



- ◆V方式(大学入学共通テスト利用入試)は、通常検定料18,000円が、2出願目以降は1学科(専攻)につき10,000円になります。
- ◆A日程は、通常検定料35,000円が、2出願目以降は20,000円になります。
- ◆V方式(大学入学共通テスト利用入試)とA日程を同時出願する場合も応援割が適用され、その場合の検定料はV方式13,000円+A日程30,000円となり、合計43,000円となります。

試験会場

A日程は東京以外でも受験可能! 自宅に近い場所で安心して受験できます

A日程は本学試験場のほか、地方8会場(札幌、仙台、新潟、長野、静岡、名古屋、大阪、福岡)でも受験可能です。



公募制自己推薦(AO型)の出願は2023年10月6日に受け付けを終了しました。



観光まちづくり 第3号

発行人 西村 幸夫
 編集人 楓 千里
 小林 裕和
 椎原 晶子
 編集 仲野 潤一
 南雲 勝志
 アートディレクション 大森 慎也
 (株式会社メークメリーカンパニー)
 デザイン 児玉 陽子
 (株式会社メークメリーカンパニー)
 校閲 株式会社ぶれす
 発行 2023(令和5)年11月1日
 発行所 國學院大學
 観光まちづくり学部
 〒225-0003
 神奈川県横浜市青葉区新石川 3-22-1
 電話 045-910-3800
 cmi@kokugakuin.ac.jp
 印刷所 共立印刷株式会社

観光まちづくり学部WEBサイトのご案内

観光まちづくり学部について、ホームページで詳しく紹介しています。また、専任教員が専門分野や学生への期待などを動画で語っています。以下からご覧ください。

観光まちづくり学部
ホームページ



観光まちづくり学部
専任教員動画



観光まちづくり学部公式
X(旧ツイッター)もぜひご
覧ください。学内のイベン
トやゼミや学生の活動を
アップしています。



観光まちづくり学部 GUIDEBOOK 2023 「地域の夢」全ページ公開!

本学部のカリキュラムの詳細や、1期生による「ゼミや講義」、「インターンシップ体験」、「学生生活」の紹介などを一冊にまとめたガイドブックを、PDFで全ページを公開しています。奨学金などの学びのサポートやたまプラーザキャンパスの施設紹介なども詳しく掲載しています。以下からご覧ください。



※本冊子をPDFでもご覧いただけます。(2023年12月中旬掲出予定)



國學院大学の
受験生WEBサイトを
確認しよう!

ここから
アクセス



受験生向けサイトを中心にオンラインでの情報発信を行っています。

動画コンテンツ配信 大学の基本情報や、入試説明、学部学科の学び、模擬授業などを公開中。

バーチャルキャンパス 渋谷・横浜たまプラーザキャンパスを360度でご覧いただけます。

© 國學院大學 2023
 本誌掲載の記事・写真の無断転載及び複写を禁じます。